

日中大学生の「大人になること」の意味 —— 成人感をめぐる日中比較調査 ——

Becoming an Adult: A Comparative Study of Japanese and Chinese University Students' Sense of Adulthood

渡辺 忠温^{†1・2} 榊原 知美^{†1} 片 成男^{†3}

Watanabe Tadaharu^{†1・2} Sakakibara Tomomi^{†1} Pian Chengnan^{†3}

^{†1} 東京学芸大学

^{†1} Tokyo Gakugei University

^{†2} 一般財団法人発達支援研究所

^{†2} Developmental Research Support Center

^{†3} 中国政法大学

^{†3} China University of Political Science and Law

Abstract: This study explores the perspectives and characteristics of Japanese and Chinese university students regarding the transition to adulthood. To achieve this, we conducted intercultural understanding class sessions on the topic of "becoming an adult" for university students in Japan and China and analyzed their written responses to the worksheets and questionnaires during the course. The results revealed that in both countries, gaining independence from parents and family is a central developmental task at this stage, while active transition into adult society remains limited. However, notable differences were observed: in Japan, the transition to adulthood is characterized by self-realization through the acquisition of a "sense of adulthood" in daily life, whereas in China, the focus is on restructuring interpersonal relationships with an awareness of future integration into adult society. These findings highlight both shared and distinct characteristics of the transition to adulthood in Japan and China.

キーワード：成人感，日本，中国，自立，成人形成期

Keywords: Sense of Adulthood, Japan, China, Independence, Emerging Adulthood

1. 問題

1-1. 成人への移行の時代的变化と成人感

日本でも中国でも、民法によって18歳に達すれば誰でも法律上の「成人」(成年)になる。18歳になれば、

自動車の普通免許の取得や飲酒・喫煙（日本では20歳から）といった、未成年の時にはできなかったさまざまなことができるようになる。そこには、大人と子どもとの間の明確な境界線が存在している。

一方で、自分自身が「大人になった」という主観的な感覚（以下では「成人感」と呼ぶ）については、年齢上の境界線・基準もあいまいであり、それを獲得する過程の個人差も大きい。27歳前後と30歳前後の女性を対象に面接法による調査を行った白井（2020）

では、30歳前後で「あなたは大人だと思いますか」について肯定的であったのは3分の1の人に過ぎず、「あなたは一人前だと思いますか」という質問に対しても、約半数は否定的であった。また、多くの研究で、20代の「成人感」が、ある部分では大人に感じるが、別の部分ではそうではないといった具合に、両面的で複雑なものであることが示されてきた (Arnett, 2000; Nelson & Luster, 2015)。

かつては教育段階からの卒業、就職、結婚といった成人への移行のメルクマールとなるような出来事が、青年期の発達課題あるいは目標として考えられ、同時に成人感獲得の明確な基準として機能していた。それらのライフイベントを達成することで、青年期から成人期への移行は完了し、社会的に「大人」として認められるだけでなく、主観的にも「大人になった」実感が得られていた。ところが、現代では、それらのライフイベントは以前より遅い年齢で達成されるようになり、成人期への移行を示す指標としては考えにくくなった。たとえば、結婚の年齢について言えば、1975年の日本の平均初婚年齢は、男性27.0歳、女性24.7歳であったが、2022年には男性31.1歳、女性29.7歳となっており、4から5歳程度上昇している (国立社会保障・人口問題研究所, 2024)。中国でも、1980年には23.59歳だった平均初婚年齢は、2010年には男性25.75歳、女性24歳となり、2020年の人口普査調査では男性29.38歳、女性27.95歳まで上昇している (人民網日本語版, 2022)。同様の晩婚化の傾向はアメリカでも見られ、1960年代以降結婚・出産の年齢は上昇している (Arnett, 1994)。

現代的な、20代におけるあいまいな成人感のあり方は、こうした、卒業・就職、結婚といったライフイベントの後ろ倒しとその一因として考えられるが、その背景要因としては、ひとつには、高学歴化の進行や教育費の高騰、雇用環境の変化 (非正規雇用の増加など)、ライフスタイルの多様化、といった社会的な状況の変化が挙げられる。また、もうひとつの背景としては、個人主義的な価値観の広まりが挙げられる。社会的にも、独り暮らし・核家族の割合や離婚率の上昇、世帯人数の減少といった形で社会の個人主義化は進んでおり、そうした傾向は日本と中国でともに見られる (Ogihara, 2018; 2023) が、心理的な面でも、

日本では、1960年代から1970年代の高度経済成長期以降、それまでの社会からの期待への適応 (アウトサイド・イン) を中心とした青年期の発達課題から、自分自身のニーズや関心を社会に投影する (インサイド・アウト) 形での青年期の発達課題への変化が起こることによって、伝統的な成人感獲得の過程や時期も変化していったものと思われる (Sugimura & Mizokami, 2012)。すなわち、それまでの、社会から求められるものを学び、身につけていくという、大人の社会への「適応」を重視した成人期への移行のあり方から、自己実現やアイデンティティの達成を優先し、大人の社会への移行については、自分に合った場を選択するといった「自己実現」重視の成人期への移行へと変化した結果、大人の社会に移行することを急ぐよりも、本来あるべき自分とは何か、どのようなものなのかについて模索し、探求する期間が重視されるようになってきた。

卒業・就職、結婚などの後ろ倒しは、かつては、青年期の延長と成人期の開始の遅延として、現代の青年が抱える問題のようなものとして考えられていたが、Arnett (2000) は、この比較的長い青年期から成人期への移行の途中の期間を、流動性が高く、将来の見通しへの不安も高い現在の社会に対して若者たちが積極的に探求と模索を行っている結果として肯定的にとらえ、「アイデンティティの探求」「不安定性」「自己焦点化」「狭間にいる」という感覚」「可能性・楽観性」を特徴とする「成人形成期 (emerging adulthood)」という新しい発達段階として概念化した。すなわち、成人形成期は現代の青年たちの時代的な社会の変化に対する適応の結果として考えることができるが (白井, 2021)、それと同時に、研究上の視点からは、社会の変化に応じて変化し続ける20代の青年期のあり方を理解するうえで、既存の見方を一面的にあてはめるのではなく、青年自身の考え方や生き方をボトムアップに検討し、理解を更新していくことの重要性も示している。実際、Arnettによる概念の提案以降、成人形成期の現代の若者たち自身の視点での成人感のあり方が、数多くの研究においてインタビューや質問紙調査を通じてボトムアップに検討されてきた。

1-2. 社会文化的文脈の違いと成人感

社会的文脈や文化的集団が異なれば、発達目標や過程の多様性が生じることについては、これまで様々な先行研究で示されてきた (e.g., Rogoff, 2003). 成人形成期における成人感の発達についても同様であり、前項で述べたような時代的变化だけでなく、学生が置かれた社会文化的状況の違いによっても差異が生じる。

たとえば、アメリカの4年制大学の学生と、学生の文化的背景の多様性が高く、社会経済的地位も低いとされるコミュニティカレッジの学生との間で、成人形成期への同一化の程度を比較した McCoy, Chou, Grahe, Miller, & Photias (2024) の研究では、4年制の大学生が、人生においてより「否定的／不安定」で思春期と成人期の「中間」であることを強く認識しているのに対して、コミュニティカレッジの学生はよりアイデンティティ探求が進む人生の時期として成人形成期を認識していた。

また、Crocetti et al. (2015) は日本とイタリアの18歳から30歳の成人に Inventory of Dimensions of Emerging Adulthood (IDEA) (Reifman et al., 2007) の短縮版を作成して実施したところ、Arnett が提唱した成人形成期の5つの因子（アイデンティの探求、不安定さ、自己中心性、中間の感覚、可能性）が日本でもイタリアでも確認できると同時に、イタリアに比べていずれの下位尺度においても日本の得点が高く、この年齢層の日本人成人が、より Arnett が提唱するところの成人形成期の特徴を持っていることを明らかにしている。

注目すべきは、成人形成期における成人感の生じ方やその過程が、単に社会文化的な背景が異なる若者の間や国・地域が異なる若者の間で異なるということだけではなく、それぞれの文化的集団における規範、人間関係構築のあり方、行動様式の中でも特に重要な側面を反映する形で差異が現れやすいという点である。

Cole (1996) は、ちょうど新生児の両親が、子どもに向かって将来のことについて話し始める時（「この子は将来～になるんじゃないかな」といったことについて）に自分たちが経験してきた過去を参照しつつ、同時に将来をそうした過去の似姿として想像しながら

話し合う例を挙げている。成人形成期における若者も、この Cole (1996) の例と同様に、彼らが想像する大人の社会と、そこで必要なスキルや知識を考えながら、成人形成期における探求・模索をしているはずである。そこには、過去の経験の中で学んできた、彼らが属する文化的共同体における理想の人間関係のあり方や規範的な大人のふるまい方が含まれており、それによって、各文化的共同体が持つ行為・思考などの特徴が、成人感のあり方にも反映されることとなる。

たとえば、ラテン系およびアフロ・カリビアン系移民のコミュニティカレッジの学生にインタビューを行った Katsiaficas, Suárez-Orozco, & Dias (2015) の研究では、学生が大人への移行の最終的目標として、「自立と責任」という、4年制大学の学生 (Arnett, 2003) と同様の個人主義的な目標を持っていただけではなく、家族に対する社会的責任という、彼らが属する文化的共同体の人間関係の特徴を反映した、移民コミュニティカレッジ学生独自の大人への目標を持っていることが明らかにされている。

また、インドでは「定住する (settling down)」という概念がほぼ結婚して家庭を持つことと同義として長らく青年期から成人への移行の最終的な目標とされてきたが、近年の社会やライフスタイルの変化によって、「定住する」という概念の重要性は残したまま、キャリアの形成、恋愛、親の監視からの逃避のために、現代の成人形成期の若者たちは「移住する」ようになっており、インドの若者たちの自立のあり方に影響を与えている (Chakshu Narayan, & Chakraborty, 2024). つまり、インドにおける社会のあり方を反映した、特徴的な成人への移行のあり方がかつてはあったものの、ここでも時代的な変化によって、その成人への移行のあり方が変化してきている。

したがって、成人形成期前半における「大人の実感」を生じさせるものを検討することは、ひいては、それぞれの学生が置かれた社会・文化の特徴を明らかにすることにもつながるものとなる。

1-3. 異文化理解としての成人感と本研究の目的

以上述べてきたように、現代の流動的で不安定な社会において、成人形成期の若者の成人感のあり方を知

るためには、その渦中にある若者自身がどのように成人感とその獲得過程を表現するかを検討する必要がある。また、成人感のあり方は、国や地域と言った社会文化的な文脈が異なれば違ってくる可能性があり、それはそれぞれの文化的集団における重要な側面を反映している可能性がある。

そこで、本研究では日本と中国の大学生を対象に大人になることに関連する異文化理解授業を実施し、その中で学生たちが回答したテキストの分析を通じて、これまで先行研究において検討されることが少なかった、日本と中国の大学生の大人になることについての考え方の違いとそれぞれの国の学生における特徴について明らかにすることを目的とする。ただし、各国における理想的・規範的な観念上の大人のあり方と、現実に大学生の段階で感じている大人になった実感にはズレが生じる可能性も考えられる（文化的に規範と現実のズレが生じている例としては、渡辺・片・山本・榊原（2015）を参照）。そのため（1）理想的・規範的なものとして、異文化理解授業の過程で、個人用シートに記入された「大人になることの意味」、（2）現実的なものとして、質問紙調査において自由記述形式で回答された「大人になること・成長の主観的感覚・きっかけ」の2つのデータについての違いも同時に検討することとした。

2. 方法

2-1. 交流授業の概要と参加者

本稿で分析対象とするデータは、2012年11月から1月にかけて、東京都内のA大学と中国・北京市内のB大学の間で合計6回（日本3回、中国3回）行われた異文化交流授業の過程で得られたものであり、この異文化理解授業は、これまで日本と中国の大学の間で対話的な異文化交流授業を実践し、その中で学生たち自身がお互いの文化の間にある違いや共通性について考え、議論することを進めてきたプロジェクト（Pian, 2017; Sakakibara, 2017; 榊原・片・高木, 2012; 榊原・片・渡辺, 2024）の中で行われたもの

である。

異文化交流授業は、日本と中国の「成人式」の実態や、それに対する考え方の違いに関する質問紙調査の質問項目を日中の学生がそれぞれ話し合っ提案し、その項目をもとに作成された質問紙を両国で実施し、結果を共有することで互いの国の状況や考え方の違いについて理解することを目的としたものであった。

異文化交流授業には、日本側は、質問紙項目の検討時（第1回；個人シート記入時）に45名、質問紙調査実施時（第2回）には52名（平均年齢20.42歳）が参加し、中国側は、質問紙項目の検討時（第1回）に33名、質問紙調査実施時（第2回授業）には、授業受講者では28名、別の授業で23名が参加した（平均年齢19.51歳）。質問紙調査時の日本の学生のうち、23名は自宅から通学、28名は自宅以外（独り暮らし、寮など）から通学していた（1名は不明）。

2-2. 交流授業と調査の流れ

異文化交流授業と質問紙調査の具体的な内容・流れは以下のとおりである。

（1）第1回授業（日本：2012年11月20日、中国：11月21日）

日本と中国の第1回目の授業では、まず学生に各自で「個人用シート」に記入することを求めた。その後、今回の授業のテーマと進め方（1.「成人式」をテーマに質問紙を作成する。2. 質問項目は日中で別々に作成し、それらを合体して1つの質問紙とする。3. 質問紙が完成したら自分たちで回答し、その結果を日中で比較する。）について説明したうえで、5名程度で構成されるグループに分かれ、質問紙に含めるべき項目をグループで話し合ったうえでグループ用シートに記入させた。個人用シートとグループ用シートの質問項目は共通であった（Table 1）が、個人用シートでは個人の考え方を記入することを求め、グループ用シートでは、議論の結果提案された質問紙調査の項目案を記入させた。

Table 1 個人用シートとグループ用シート共通の質問項目

項目	質問文
成人式の現状	日本（中国）において、成人式はどのような形で行なわれていますか。あなたが知っている範囲で教えてください。
理想とする成人式	あなたはどのような成人式が望ましいと思いますか。
成人式に関する意識	成人式を行う意味について、あなたの考えを教えてください。
大人になることの意味	大人になるということは、何を意味していると思いますか。

(2) 第2回授業（日本：12月11日、中国：12月12日）

第1回授業で回収されたグループシートの質問項目をもとに、授業実施担当者間で内容の検討を行い、「成人式に関する日中共同質問紙調査」と題した質問紙を作成した。まず日本語版が作成されたうえで、内容に翻訳上の意味の差異が生じないように担当者間で相談しながら、中国語版への翻訳を行った。作成した質問紙は、第2回授業の中で参加者に配布し、回答を求めた。

(3) 第3回授業（日本：2013年1月8日、中国：1月2日）

第3回授業では、各国の講義の中で、質問紙調査のうち量的調査部分の結果の共有と説明を行った。結果は、中国語版が先に作成され、日本の学生に対しては翻訳を行ったうえで、日本と中国の学生に共有された。

2-3. 分析対象となるデータ

本稿で分析対象となるデータは、(1) 第1回授業における、「大人になることの意味」についての個人用シートの記述内容、および(2) 質問紙調査における「成長の主観的感覚・きっかけ」についての自由記述の回答内容である。

(1) 「大人になることの意味」

第1回授業において、グループで質問紙調査の項目を検討するための準備として学生たちが記入した個人シートの中で、「大人になるということは、何を意味していると思いますか。」という質問に対する自由記述の内容である。

(2) 「大人になること・成長の主観的感覚・きっかけ」

第2回授業で実施した「成人式に関する日中共同質問紙調査」質問紙は、(1) 回答者の基本情報（年齢、

専攻、学年）、(2) 現在住んでいる場所（親元を離れているかどうか。日本の学生のみ実施）、(3) 成人式への参加経験、(4) 現行の成人式についての考え方、(5) 理想の成人式についての考え方、(6) 成人式の意味、(7) 大人になること・成長の主観的感覚・きっかけ、(8) 大人になることの意味、という内容から構成されていた。その中で、本稿では、(7) 大人になること・成長の主観的感覚・きっかけ、についてのみ分析と結果の報告を行う（(8) 大人になることの意味、については、その質問紙調査のもととなった第1回授業の個人シートの自由記述の分析を行う）。

「大人になること・成長の主観的感覚・きっかけ」は、「大学に入ってから現在まで、高校時代と比べて自分が「大人になった」「成長した」と感じることはありますか？「大人になった」「成長した」と感じている場合は、どのような面で成長したか、またその成長のきっかけとなった出来事、などについて（書ける範囲で）具体的に書いてください。」という教示文のもと、自由記述形式で回答を求めたものである。

2-4. データの分析方法

上述の分析対象となるデータに対して、カテゴリー・モデル生成型の質的分析（能智，2011）を行った。自由記述データの質的分析では、まず概念とカテゴリーの抽出段階では、M-GTA（木下，2003）による分析を行った。自由記述の回答を全体的に読み込んだうえで、各学生の回答の一部または全体をもとに概念作成を行い、その後サブカテゴリー、カテゴリー、コアカテゴリーを順に作成していった。中国の学生の回答については、翻訳文を作成すると同時に、原文も参照しながら概念作成を行った。

分析において、分析焦点者はすべて日本と中国の一般的な大学生とした。また、分析テーマについては、「大人になることの意味」では、学生たちが「大人になることの意味」と考えている概念を抽出することとし、「成長の主観的感覚・きっかけ」については、1. 「中国と日本の大学生には、どのような場面・状況やきっかけで大人への変化の感覚が生じているか（大人への変化のきっかけ・場面）」、および2. 「どのような内容の出来事について大人への変化を感じているか」（大

人への変化の内容」という、2つの分析テーマを設定したうえで、同一の自由記述データに対して、2度のオープンコーディングと選択的コーディングを行った。

今回のデータは、質問紙調査の自由記述データであり、個々の学生の回答はあまり厚い記述にはなっていない。具体的に日本と中国のひとりの学生あたりの書き込み文字数の平均をみても、「大人になることの意味」では、日本：37.00字に対して中国：62.55字、「成長の主観的感覚・きっかけ」では、日本：59.60字に対して中国：61.69字となっており、日中両国ともに書き込み量が少ない。それでも中国の学生の記述には、複数のカテゴリー間の関係を示唆する内容がしばしば見られるが、特に書き込み量の少ない日本の学生の記述内容については、その記述内容のみから軸足コーディング的にカテゴリー間の関連付けをボトムアップに行っていくことは難しかった。

そこで、軸足コーディングとストーリーラインの作成は行わず、記述データからのボトムアップなコアカテゴリー形成（選択的コーディング）までに分析をとどめた。そのうえで、日本と中国の間、「大人になることの意味」と「成長の主観的感覚・きっかけ」との間の比較を行った。また、個別の具体的な出来事についての記述が比較的多い「成長の主観的感覚・きっかけ」では作図は行わなかったが、結果の中で言及したうえで、分析の過程で見られたカテゴリー間の関連性を参考に、「大人になることの意味」については模式図の作成を行った。

また、概念を生成する際の対象となる部分は回答の一部であったとしても、回答全体を参照しながら解釈を行わないと意味がとれないものもあった。そこで、概念やカテゴリーの生成時には、該当する箇所だけではなく、回答全体を確認しながら作業を行った。同時に、早い段階で抽象度を上げることで、データから離れたカテゴリー形成に進んでしまう（省略された細かいニュアンスの違いに気づかなくなる）ことへの懸念から、概念生成段階では、in-Vivo コード気味に、極力もとの回答の表現をそのまま概念名に反映させ、サブカテゴリー生成時に、抽象度を上げつつ他の概念との類似の検討や比較を行うようにした。

2-5. 倫理的な配慮

交流授業の中での学生の活動データについては、授業開始時に、交流授業の趣旨説明と研究同意書の内容について説明したうえで、研究上でのデータ利用への同意を、研究同意書へのサインという形で得ている。

3. 結果

3-1. 「大人になることの意味」自由記述データの分析

まず、第1回授業で学生に記入を求めた個人用シートの中の項目である「大人になることの意味」についての自由記述データを対象に分析を行った。「大人になることの意味」は、後述する「大人になること・成長の主観的感覚・きっかけ」とは異なり、学生たちが実際に経験しているとは限らない、観念的な「頭の中での」大人像をたずねるものである。この個人用シート内の「大人になることの意味」の項目には、授業に参加した全ての学生が何らかの書き込みを行っており、日本は45名、中国は33名であった。以下では、カテゴリーは【】、サブカテゴリーは<>、概念は（）で表す。

「大人になることの意味」については、26のカテゴリー、48のサブカテゴリー、180の概念から構成されていた（Table2）。以下では、コアカテゴリーごとにその内容と説明を簡単に述べる。

なお、文中のカテゴリーを【】、サブカテゴリーは<>、概念は（）で表す。また、分析時に各回答に対して番号を付して分析したが、以下で回答の文章を引用する場合には、引用の後に（国名・番号）として、その該当する番号も示す。

Table 2 「大人になることの意味」についての概念とカテゴリー

【カテゴリー】	＜サブカテゴリー＞	（概念）	サブカテゴリーの定義・説明（回答数 中国：日本）
1) 自立			
(a) 自立	(1) 自立すること	自立すること／自分の生活をする／様々な面で自立する／様々な面で自立するプレッシャーに向かい合うことになる／自立した個人であることを意味する／社会的に自立する	自立することを大人になることの意味として挙げている場合で、具体的な自立の側面・内容については触れられていない場合。(10：6)
	(2) 他人に頼れなくなる	甘えられなくなる／他人に頼らない／ほとんど全てのことがらを自分でできるようになる	他人に頼れなくなることを大人になることの意味として記述されている場合。ほぼ自立の意味に近いが、他者との関係を念頭に置いて自立について述べられている場合。(3：1)
	(3) ひとりで生きていくこと	ひとりで人生の道のりをはじめるようになること／孤独が増すこと／一人で生きていくこと	ひとりで生きていくことが大人になることの意味として記述されている場合。自立して生きていくという意味合いと「少し孤独が増す。」(中国 16)のように、「ひとりぼっちになる」といった意味合いもある。(2：1)
	(4) 自分で問題を解決できるようになること	自分で問題の解決方法を考える／問題を自分で解決する／現実の問題に向き合わなければならなくなる	自分で問題解決を行うことが大人になることの意味として記述されている場合。(3：0)
(b) 生活の自立	(1) 生活上自立すること	自立して生活する／生活上の自立	生活上自立することが大人になることの意味として記述されている場合。(2：0)
(c) 経済的自立	(1) 経済的に自立すること	経済的に自立すること	経済的に自立することが大人になることの意味として記述されている場合。(1：2)
(d) 精神的自立	(1) 精神的に自立すること	精神的に自立する	精神的に自立することが大人になることの意味として記述されている場合。(0：2)
(e) 親からの自立	(1) 親に頼らなくなる・親から離れること	親に頼らなくなる／父母が自分に対して責任を負わなくなる／父母の養育義務が終わること／父母の庇護のもとから離れていくこと	親に頼らなくなるが大人になることの意味として記述されている場合(6：1)
	(2) 親に頼れなくなる	親に堂々と生活費を要求できなくなる	親に頼れなくなるが大人になることの意味として記述されている場合(1：0)
2) 自立の行動的側面			
(f) 自己選択・自己判断・自己決定	(1) 自分で選択・決定すること	自分で決定すること／自分で決定を下すようになること／自分で生活について選択ができるようになること／自分で選択すること	自分で選択・決定できるようになることが大人になることの意味として記述されている場合。(5：0)
	(2) 判断力が増すこと	自分の行動を客観的に判断できること／正しいことについて判断できるようになること／後先のことを考えて行動するようになること	判断力が増すことが大人になることの意味として記述されている場合。(1：2)
(g) 自主性	(1) 自主的になること	自主性が増すこと／自主的であること／自主的に考え行動すること／自主的になること	自主的になることが大人になることの意味として記述されている場合。(4：0)
(h) 主体性	(1) 自分の考えを持つこと	自立して自主的に考え行動すること／信念に基づいて行動に移すことができること／自分自身の軸を一本持っていること／自分の考えをしっかりと持つこと／信念を持って生きること	自分自身の考え方や信念を持つことやその考え方に基づいて行動することが、大人になることの意味として記述されている場合。(1：4)
(i) 自由さ	(1) 自由になるということ	父母の束縛を受けなくなること／行動の自由が増す／自由に好きなことができる／自由になるということ／自由になる時間やお金が増えること／自由になるということ／自由を手に入れること	自由になることが大人になることの意味として記述されている場合(6：1)
3) 他者に働きかける関係への変化			
(j) 守る・育てる立場への変化	(1) 自分の家庭を築くこと	自分の家庭を築くこと	自分の家庭を築くことが、大人になることの意味として記述されている場合。中国の学生の1例のみであり「自分の家庭を築き、あとの世代を残すことを求め始める」(中国・3)という記述から見て、家庭を築くことによる「自立」の面よりも「後の世代を残す」「後の世代を育てる」という意味合いが強いと考えられる。(1：0)

	(2) 育てる立場になること	後の世代を残すことを考える／子どもを育成する立場になること／はぐむ人になること／子どもの手本になる行動をとるようになること／子どもの手本になるように目指すこと	育てられる立場から育てる立場への移行が大人になることの意味として記述されている場合。中国の1件の回答は、＜自分の家庭を築くこと＞でも挙げた「自分の家庭を築き、あとの世代を残すことを求め始める」（中国・3）であり、自らの家族を残す意味合いがあるのに対して、日本の場合は社会一般の「子ども」に対して「育てる」意味合いが含まれている。（1：4）
	(3) 他の人を守る側になること	他の人を守ること／守る側になること／守るべき人を守ること／他の人を助ける義務があること	他の人から守られる立場から守る立場へと変化するものが大人になることの意味として記述されている場合。（3：1）
	(k) 他者のことを考える	(1) 親をいたわるようになること (2) 自己中心的でなくなることを意識する／他人を尊重すること／他人を思いやれること	親をいたわるようになることが、大人になることの意味として記述されている場合。（1：0） 他者のことを考えて行動するようになる、自己中心でなくなる、といったことが大人になることの意味として記述されている場合。（2：1）
4) 自由と自律			
(l) 自律	(1) 自分の行動をコントロールできるようになること	モラル・節度を持つ／理性的に行動する／理性的に衝動をコントロールできるようになる／落ち着いていること／感情的に行動しないこと／時間やお金をコントロールするやり方を学ぶこと／自由でいられる度合いを把握しておくべきである／自律した行動がとれるようになること／自律すること	自分の行動や感情を自律的にコントロールできるようになることが大人になることの意味として記述されている場合。（6：4）
5) 責任			
(m) 自分に対する責任の増加	(1) 自分に責任を持つこと	自分に対する責任が増すこと／自分に対する責任を引き受けること／自分に責任を持つこと／自分のことに責任をもつこと	自分に責任をもつことが大人になることの意味として記述されている場合（3：2）
	(2) 自分の言動に責任を持つこと	自分の言動に責任を持つこと／自分の行動に責任を持つこと／言動に責任を持つこと／間違いを犯しても大目に見てくれなくなる／自分の行動に対する責任が生じること	自分に責任をもつことが大人になることの意味として記述されている場合で、特に言動についての責任について記述されている場合（6：16）
	(3) 自己・責任：自分の人生に責任を持つこと	自分の人生に対して責任を持つ	自分の人生に責任をもつことが大人になることの意味として記述されている場合（1：0）
(n) 責任の増加	(1) 責任を引き受けるようになる・責任が増すこと	多くの責任を引き受けなければならないこと／多くの責任がかかるようになること／多くの責任を引き受けるようになること／責任が重くなること／責任が生じること／責任が増すこと／責任を意味する／責任を取ることができること／責任をとる立場になること／責任を引き受けるようになること／責任を引き受けること／責任を持つこと	責任が増す、責任を引き受けるようになることが大人になることの意味として記述されている場合。【自分に対する責任の増加】のように、責任の対象については特に書かれていない場合。（18：10）
(o) 他者に対する責任の増加	(1) 親や家族に対して責任が生じること	親や家族に対して責任を持つ／家庭と親への責任が増すこと／父母や家族に責任を持つ／家族への責任が増すこと／家庭を支える責任を負うようになること／家庭や社会に対する責任を引き受けること	親や家族に対して責任が生じること、責任を負うことが大人になることの意味として記述されている場合。「より多くの、家庭、社会や、自分に対する責任を引き受けなければならない。」（中国21）のように、社会への責任と同時に書かれている場合もある。（5：1）
	(2) 国や社会に対する責任が生じること	国や社会に対して責任を持つこと／社会的責任が増加すること／社会や社会の他の人に対して責任を持つこと／友人や恋人に対して責任を持つ／所属する集団への責任が増すこと	社会や社会の中の他者に対して責任が生じること、責任を負うことが大人になることの意味として記述されている場合。「国と社会に対して、父母や家族に対して、友人や恋人に対して、私たちは責任を負うようになる。」（中国12）のように、友人や恋人といった身の回りの他者だけでなく、国や社会といったマクロなものについても家族と同時に責任の対象として書かれている場合がある。日本の学生は「所属する集団への責任（が増すこと）」（日本31）といったように社会全体ではなく、所属する集団に対する責任として記述している（4：1）

6) 精神的变化・能力の向上・成長

(p) 自己認識の変化	(1) 自己認識が変化すること	自分に対して尊重する／自分の価値を理解すること	自分についての認識が変化することが大人になることの意味として記述されている場合。(2:0)
	(2) 大人であることを自覚すること	自分が大人であることを認識すれば大人／成人として自覚すること／自分が小さな子どもではないこと／気持ちの問題(自分が自立したと思ったら大人である)	大人であることを自覚することで大人になると記述している場合。ある種自己認識の変化でもあるが、大人になることと直接結びついた意識の変化について述べられている場合。(1:3)
(q) 精神的な変化	(1) 精神的に変化すること	気持ちに余裕をもつこと／辛いことを耐え忍ぶこと	精神的な面での変化が大人になることの意味として記述されている場合。(1:1)
	(2) 悩みが多くなること	悩みが多くなること	悩みが多くなることを大人になることの意味として記述されている場合。「能力が少し高くなる。悩みが少し多くなる。少し孤独が増す。少し成熟する。チャレンジすることが少し増える。最も重要なのは、責任がとて多くなるということだ。」(中国16)や「成人することは責任を意味し、悩み事が出てくることを意味し」(中国27)に見られるように、大人になって責任が増すこととともに悩みが多くなることが述べられている(2:0)
(r) 成長・成熟	(1) 能力が高くなること	能力が高くなること	能力が高くなることが、大人になることの意味として記述されている場合。(1:0)
	(2) 成熟すること	成熟すること／考えが成熟する／精神や性格の成熟／大人として振る舞うこと／物ごとのやり方が成熟する	成熟すること、考え方や行動が大人の成熟したものに変化することが大人になることの意味として記述されている場合。(7:0)

7) 権利と義務

(s) 権利の獲得・享受	(1) 権利を獲得・享受すること	多くの権利を享受するようになること／権利が増すこと／権利を享受すること／社会の一員としての権利を享受すること／権利(参政権、飲酒、喫煙)が増えること／成年になってはじめてできることをできるようになること／飲酒が可能になること／喫煙できるようになること／選挙権と被選挙権を持つこと／年金を支払うようになること	権利を獲得し、享受することが大人になることの意味として記述されている場合。(社会の一員としての権利を享受すること)や(選挙権と被選挙権を持つ)は社会の一員となること、という意味あいも持つ(7:4)
(t) 義務	(1) 義務を果たすこと	義務(納税など)が増える／社会の一員としての義務を履行すること／権利を享受するからには義務も果たす／自由の代価を払うということ	義務を果たすことが、大人になることの意味として記述されている場合。中国の学生の記述には、大人になることによって得られる比較的正面的なことの見返りとして何らかの義務を果たすことが必要であると述べられていることが多いが、その得られることには、社会の一員になる、権利を享受する、自由を享受する、といったバリエーションが存在する。(3:1)

8) 社会参加

(u) 法律上の立場の変化	(1) 法律上大人になること	法律上自立した個人となる／法律上の大人	法律上の大人になることが大人になることの意味として記述されている場合。(1:1)
	(2) 法律上の責任が生じること	法律上のより多くの責任を負うこと／完全な刑事責任を負うようになること／法律上の完全行為能力者になること／法律上の責任と行為能力を持つこと	法律上の責任が生じることが大人になることの意味として記述されている場合。(4:0)
(v) 社会の一員への移行	(1) 社会から大人として見られるようになること	社会の目が厳しくなること／周囲の人々も自分を子どもとしては見なくなる／社会・他者からの評価による	社会や周囲の人々からの見方や評価が変わることが、大人になることの意味として記述されている場合。(1:2)
	(2) 政治に関わるようになること	政治に関わるようになること	政治に関わるようになることが、大人になることの意味として記述されている場合。(0:1)
	(3) 就職すること	就職すること	就職することが、大人になることの意味として記述されている場合。(0:1)
	(4) 社会の一員になること	社会の正式な一員となる／社会に向けて一歩足を踏み出すこと／社会の主な戦力になったということ／大人の社会に加わる資格を持つようになったこと	社会の一員になることが、大人になることの意味として記述されている場合。(4:0)
	(5) 社会の一員としての自覚・責任を持つこと	社会の一員としての自覚を持つ／社会の一員としての責任を負うこと／社会の一員としての責任を持つこと	社会の一員としての自覚を持つことや責任を持つことが大人になることの意味として記述されている場合。自覚についてのみ野辺らにしている場合と、自覚と責任の両方に言及されている場合がある。(0:4)

	(6) 社会・世の中について知るようになること	社会に対して興味を持つようになること／社会について理解すること／身の回りのことにより注意深くなること／世渡りの知識や経験が増えること	社会や世の中について理解しようとしたり、理解することが、大人になることの意味として記述されている場合。(3:1)
(w) 社会への貢献	(1) 社会に貢献するようになること	社会の一員として役に立つとすること／社会の一員として貢献すること／社会のために貢献すること／自分の社会的役割について認識する／社会のために勤めるようになること	社会の役に立ったり貢献することが、大人になることの意味として記述されている場合。(3:2)
9) 計画性			
(x) 計画性	(1) 自分の目標を持つこと	追求するものを持つこと／手に入れたものを努力して手に入れる／目標をもつこと／自分に合わせた目標を追求していくこと／自分を完全なものにしようとする／目標に基づいて行動に移すことができること／チャレンジすることが増えること	目標を設定したり、目標や獲得したいものに向かって行動することが、大人になることの意味として記述されている場合。(6:1)
	(2) 人生や将来について考えること	人生の方向性について計画し始めること／自分の将来について計画すること／将来の計画を立て始めること／自分の人生を自分で切り開くこと／先のことについて見通すこと	将来の計画を立てたり、人生について考えることが大人になることの意味として記述されている場合。概念(先のことについて見通すこと)は、原文では「先をどれだけ見えているか。」(日本29)であり、人生や将来といった長期的な見通しではなく短期的な予測を持って行動することを大人の意味として考えている可能性もある。また、(自分の人生を自分で切り開くこと)といった場合、単に計画性があるだけではなく、自主性や責任といった意味合いも含まれていると思われる。(5:1)
10) メルクマールの事柄との関係			
(y) メルクマールの事柄との関係	(1) 通過儀礼との関係	通過儀礼によるものではない	大人になることと通過儀礼との関係について言及している場合。ただし、通過儀礼と大人になることとの関連に対して否定的なものであった。(0:1)
	(2) 年齢との関係	20歳になれば大人というわけではない／20歳とは限らない／満二十歳以上になってから	大人になることと20歳という年齢との関係について言及している場合。年齢と大人になることとの関係については、関係があるとするものから関係がないというものまで、バリエーションがある。(0:3)
11) 意味はない・分からない			
(z) 意味はない・分からない	(1) 意味はない・分からない	大人になることに意味はない／大人ではないので分からない／大人になることの意味が分からない	大人になることの意味はない、もしくは意味が分からないと記述されている場合。(0:3)

注)「サブカテゴリーの定義」内の括弧の中の数字は、中国：日本の順で、各カテゴリーに対応する回答の数を表す。

1) 自立

(a)【自立】に関係することがらが、大人になることの意味の一側面として記述されていた。また、自立のヴァリエーションとして具体的に、(b)【生活の自立】、(c)【経済的自立】、(d)【精神的自立】の3つの側面が挙げられていた。

また、「社会的に自立する」(日本・27)や「もうあらゆることを他の人に頼ったりするべきではなく」(中国・23)のように、特定の自立する対象が書かれていない場合もあるが、書かれている場合には、ほぼ、(e)【親からの自立】であった。

2) 自立の行動的側面

(f)【自己選択・自己判断・自己決定】、(g)【自主性】、(h)【主体性】、(i)【自由さ】のカテゴリーは、いずれも(主に大人からの)束縛を受けていたり、他者に依存して行動を行っていた状態から、自分自身で行動を行う状態への変化を大人の意味として考えるものであり、その点において、1)で述べた概念的な「自立」そのものではないものの、その「自立」の状態が行動として表れる場合の、ヴァリエーションを示す一連のカテゴリーとして考えることができる。

(f)【自己選択・自己判断・自己決定】のサブカテゴリーのうち(f)(1)＜自分で選択・決定することになること＞については、中国の学生の記述のみであ

り、(f) (2) <判断力が増すこと>では日本の学生の回答があることから、日本の学生にとっては、自ら選択・決定することよりも、その時の判断能力の向上のほうが、より大人になることと関連するものとして考えられていることが分かる。「自立の行動的側面」における(f)【自己選択・自己判断・自己決定】以外のカテゴリについても、いずれも回答数から見ると日中の違いが明確で、(g)【自主性】と(i)【自由さ】では中国の学生が、(h)【主体性】では日本の学生の記述が多く見られた。

3) 他者に働きかける関係への変化

大人になることの意味として、他者との関係のあり方の変化がひとつの側面として記述されていた。他者との関係の変化の内容として、主に大人から守られる・育てられる関係から(j)【守る・育てる立場への変化】と、自分中心で考えていた状態から、(k)【他者のことを考える】という他者との関係性のあり方への移行の2つのヴァリエーションが見られた。

全体的に、他者との人間関係において、働きかけられる立場から、働きかける立場への移行が大人になることの意味として考えられており、特に記述の中には直接的には述べられていないものの、その働きかける立場への移行は、同時に(o)【他者に対する責任の増加】を伴うものとして考えられていると推察される((s)【権利の獲得・享受】と(t)【義務】の関係にも似ている)。

また、こうした他者との関係の変化のあり方は、見守りや管理を受けていた状態から、自由に自主的に活動する状態への変化の面も持っていると考えられ、その点では、(f)【自己選択・自己判断・自己決定】、(g)【自主性】、(i)【自由さ】とも関連があると考えられる。

ただし、後に述べるような、自立と責任、権利と義務、自由と自律、といった相補的な関係についての言及は、この「他者に働きかける関係への変化」については見られなかった。

4) 自由と自律

(理性的に衝動をコントロールできるようになる)、(感情的に行動しないこと)、(時間やお金をコントロールするやり方を学ぶこと)などの、自らの行動や感情をコントロールすることが大人になることの意味とし

て記述されていた。

たとえば、「自分の自由になる時間やお金も増え、時間とお金をどのようにコントロールするかについて学ぶことが必要になる。」(中国・26)や「『成人』は自由も意味し、私たちがもう学校や父母による行動の制限を受けたりすることはなく、自分がしたいことを選択し、自分が好きな事をしてよく、しかしながら同時に自由の度合いについて把握しておくべきであるということの意味している。」(中国・12)のように、これらの(l)【自律】の概念は、特に中国の学生において(i)【自由さ】の概念と相補的なものである。さらに、その相補性について、自立—責任の関係や権利—義務の相補的な関係が多分に社会的なものであるのに対して、(i)【自由さ】に対する(l)【自律】の関係は、個人的なものと考えられることができる。

5) 責任

責任を持つようになることが、大人になることの意味として記述されていることが多く見られた。責任を持つ対象が、自分自身である場合、他者である場合、あるいは明確に対象が書かれていない場合という3つのヴァリエーションがあり、それぞれ、(m)【自分に対する責任の増加】、(n)【責任の増加】、(o)【他者に対する責任の増加】としてカテゴリを作成した。

責任は、「自立」や「自立した行動」が可能になることと相補的な関係にあるものと考えられている。こうした「自立」を手に入れることと同時に「責任」が生じるといった大人になることの捉え方は、たとえば「自分のためにすることすべてに自分が責任を負う必要があり、それとは逆に、父母は自分のどのような事についても以後は責任を負わない、ということの意味する。」(中国・12)、「成長して大人になることは、責任を意味し、同時に自分の人生のすべての自由を手に入れることを意味する。」(中国・6)、といったように、特に中国の学生の記述に多く見られるが、「成人としての自覚と責任を持ち、自立していくこと。」(日本・8)といったように、日本の学生にもこうした相補的な考え方がないわけではない。

また、これらのカテゴリの中で、日本の学生の記述が多いのは、(m)【自分に対する責任の増加】であり、特に(m) (2) <自分の言動に責任を持つこと>のサブカテゴリで比較的日本の学生の記述が多い。こ

れは、特に責任の対象が明確に書かれていない(n)【責任の増加】だけでなく、(o)【他者に対する責任の増加】でも中国の学生の記述が多いことと対照的であった。

6) 精神的変化・能力の向上・成長

自己の変化については、精神面、能力面でヴァリエーションのある記述が見られた。ひとつは(p)【自己認識の変化】で、中国の学生のみが記述していた。(q)【精神的な変化】については、(1)＜精神的に変化すること＞として、(気持ちに余裕をもつこと)(辛いことを耐え忍ぶこと)が挙げられ、(2)＜悩みが多くなること＞を挙げた中国の学生もいた(精神的な変化について記述した日本の学生はいなかった)。また、(r)【成長・成熟】については、いずれも中国の学生の記述によるものであった。

7) 権利と義務

大人になることで、政治に参加する権利、飲酒・喫煙の権利などの多様な(s)【権利の獲得・享受】が「大人になることの意味」についての記述の中に見られる。同時に、たとえば、「社会の正式な一員となり、それに関連した義務を履行しする必要があると同時に、関連した権利を享受することができる。」(中国・33)、「権利を享受しながら義務を果たさないということはもうできない」(中国・7)といった記述に見られるように、この(s)【権利の獲得・享受】の代価として、(t)【義務】の履行が記述されることがある。

すなわち、権利を社会的に与えられることに対して、その見返りとして社会に対して義務を果たすことが大人になることに関連して言及されているのであり、こうした権利と義務の相補的な関係については、日本の学生の記述には見られなかった。

8) 社会参加

また、(v)【社会の一員への移行】、(u)【法律上の立場の変化】、(w)【社会への貢献】といったカテゴリーからは、学生たちが、大人の社会へと参加していくことを大人になることの意味として考えていることがうかがえる。

(v)【社会の一員への移行】については、漠然と「社会の一員」になることを記述している場合だけではなく、(v)(2)＜政治に関わるようになること＞や(v)

(3)＜就職すること＞といった、具体的な大人社会への移行の内容を示すサブカテゴリーも含めているが、後者のような具体的なものについては、数は非常に少ないものの、日本の学生のみが記述していた。

逆に、法律上の大人の社会への移行について示す(u)【法律上の立場の変化】については、今回交流授業を行った中国の大学が法律に関連した大学であったこともあって、中国の学生のみが記述していた。

9) 計画性

(x)【計画性】をもつことが、大人になることの意味として記述されている場合があり、(x)(1)＜自分の目標を持つこと＞と(x)(2)＜人生や将来について考えること＞の2つのサブカテゴリーから構成されている。(x)(2)＜人生や将来について考えること＞が長期的な人生や将来の計画の問題なのに対して、(x)(1)＜自分の目標を持つこと＞における「目標」や「追求するもの」、「手に入れたいもの」は、具体的な内容が書かれているものではないために、長期的なものである可能性も、短期的なものである可能性もある。また、いずれのサブカテゴリーについても、中国の学生の言及が多かった。

10) メルクマールの事柄との関係

通過儀礼(具体的には書かれていないが、たとえば成人式のようなものと考えられる)や年齢についての言及がなされている場合もあったが、多くはそれらと大人になることとの関係を否定的にとらえるものであった。いずれも日本の学生の記述であった。

11) 意味はない・分からない

最後に、(大人になることに意味はない)、(大人ではないので分からない)、(大人になることの意味が分からない)といった記述も見られた。いずれも日本の学生による記述であった。

3-2. 「大人になること・成長の主観的感覚・きっかけ」自由記述データの分析

つぎに、日中の学生たちが実際に「成人感」を感じた経験について検討するために、質問紙調査の中の「大人になること・成長の主観的感覚・きっかけ」の項目

について、自由記述データの分析を行った。この設問に対して何らかの書き込みがあったのは、日本は35名(52名中)、中国は39名(51名中)であった。

以下の文中では、「大人への変化のきっかけ」のカテゴリーを『』、「大人への変化の内容」のカテゴリーを【】で表し、両者のサブカテゴリーはともに<>、概念は()で表す。

(1) 大人への変化のきっかけ・場面

分析の結果、「大人への変化のきっかけ・場面」については、57の概念、15のサブカテゴリー、6つのカテゴリーから構成されるものとなった。

全体的に見れば、大人への変化のきっかけや大人になったと感じる場面は、大きく分けて、(E)『大学入学後の(現在の)生活』の中での出来事と、(B)『親との関係』の中での出来事、社会・家族以外の他者とのつながりの中での出来事((A)『大人の社会とのつながり』、および(C)『他者との関係』からなる)、(D)『大学入試に関する出来事』の4つに分類できる。

後述する「大人への変化の内容」での【生活の自立】とも関連するが、(B)『親との関係』カテゴリーの中で、大学に入学して、親元を離れて暮らすようになった状況を、親や故郷から離れるというニュアンスの表現を用いた場合を(B)2<親元を離れること>とし、単に一人で暮らしているという表現の場合を(B)3<独り暮らし>として分けてサブカテゴリーを作成すると、前者では中国が3件、日本が1件なのに対し、後者では中国が1件、日本が11件と、違いが見られる。また、たとえば、「大学に来て寮に住み、1人で生活し、1人で自分の面倒を見る。」(中国・38)といった記述は、親・家族・故郷への言及がないため、(B)3<独り暮らし>にコーディングされることになるが、日本的な感覚で言えば、寮で他の学生と同室で共同生活を行っている状態は「1人で生活し、1人で自分の面倒を見る」という描写とは齟齬があるように思える。この点については、中国の学生にとっての「生活の自立」「独り暮らし」が、日本の学生のような生活の運営上の自立としてではなく、親・家族・故郷からの距離の問題としてとらえられている可能性が考えられる。

Table 3 「大人への変化のきっかけ・場面」についての概念とカテゴリー

『カテゴリー』	<サブカテゴリー>	(概念)	サブカテゴリーの定義・説明 (回答数 中国:日本)
(A) 大人の社会とのつながり	1. アルバイト	アルバイト	アルバイトを行うことが、経済的自立や大人への変化のきっかけとして挙げられている場合。多くは日本の学生の回答であった(2:8)。
	2. 就職活動	就職活動／就活で内定をもらった時／就職先が決まったとき	就職活動の過程での何らかの活動が、大人になるきっかけになったり、大人になったと感じる瞬間だったりする場合。具体的には、インターンシップへの参加、就職活動で自分と向き合うこと、あるいは就職の内定をもらうことでこれまでの自分を認めてもらったと感じたこと、内定によって親戚や友人にお祝いされたこと、がある。(1:3)
(B) 親との関係	1. 親・家族とのやりとり	親・家族とのやりとり／帰省時の親とのやりとり／親と電話で話すとき／親にものを買ってあげるとき	親・家族とのやりとり・コミュニケーション場面において大人になったことが感じられると記述されている場合。具体的な場面としては、家族の話をじっくり聞く、帰省時の両親とのやりとり、母親と電話で話す、親にものを買ってあげるなどの場面が挙げられていた。すべて、中国の学生の回答であった。(4:0)
	2. 親元を離れること	親元を離れて大学に通うようになったこと／大学入学後親元を離れたこと／故郷を離れて暮らす／実家を出る	大学に入学して、親元や故郷を離れて生活し始めたことが大人の実感として述べられていたり、なんらかの大人の行動のきっかけとなっている場合。(3:1)
	3. 独り暮らし	独り暮らし／大学入学後の独り暮らし	大学に入学して、ひとりでの生活を始めたことが大人であるという実感に結び付いていたり、それをきっかけとして大人としての行動が見られるようになったと書かれている場合。親元を離れることよりも、生活を一人で行うことに重点を置かれている場合。日本の学生の回答が多く、日本の学生の回答者51名のうち、23名は大学入学後も自宅から通学していることを考えれば、独り暮らしが日本の学生の大人への変化の認識のきっかけになりやすいことがわかる。(1:11)

(C) 他者との関係	1. 他者からの影響	親・教師からの言葉／周囲の人々が恋愛をするようになったこと／大学での交友関係／大学でさまざまな価値観をもつ人に出会うこと／周りにいた人が去っていったこと／他者との交流／先輩や仲間からの非難／就活で内定をもらった時	他者からの何らかの言動が、きっかけとなって、大人への変化が起きたと書かれている場合。あるいは、他者が自分から去っていくことで影響を受ける場合も含める。「親・教師からの言葉」(親や教師など、他の大人からの言葉によって影響を受けたり、大人に変わるきっかけを得る)、「同年代の周囲の人々の影響」(周囲の人に影響を受けて将来のことを考えるようになったり、周りの友人が恋愛するようになって影響を受けたり、様々な人々に出会うことで視野が広がる、など) (6:4)
	2. 他者との関わり	他者の意見を聞く場面／社会との関わり	他者との関わり方が変化することで、大人の実感が生じたり、大人への変化のきっかけとなったと書かれている場合。逆に、周囲の人々の接し方が自分を大人として扱うようになったという変化も含める。「目上の人との関係」(敬語が使えるようになった、目上の人への態度が変わった) (1:1)
	3. 年長者との関わり	目上の人との関わり／大人の関わり	他者との関わり方が変化することで、大人の実感が生じたり、大人への変化のきっかけとなったと書かれている場合で、特に関わりの相手が年長者の場合。(1:2)
	4. 同世代との関わり	学生会の部長になったこと／飲み会／大学の中でのサークル活動・学生の活動	他者との関わり方が変化することで、大人の実感が生じたり、大人への変化のきっかけとなったと書かれている場合で、特に関わりの相手が同世代の人々であることが書かれている場合。(3:0)
	5. 恋愛	恋愛／友人の性的経験／失恋／周囲の人々が恋愛をするようになったこと	恋愛に関することがら(失恋なども含む)が、大人への変化のきっかけとして挙げられている場合。(4:0)
	6. 昔の友人に会った時	昔の友人に会う	昔の友人と会ったり、会食することが、大人の実感をもたらすものとして挙げられている場合。(0:2)
(D) 大学入試に関する出来事	1. 大学入試時の進路選択	大学入試時の進路等選択／大学進学(進学するか留年するか)について決める時	大学入試(中国では高考)の際に、進学先を選択する、あるいは大学に進学すること自体を選択することが、大人の実感をもたらしたり、きっかけとして挙げられている場合。2人の回答者が回答していたが、いずれも中国の学生であった。(2:0)
(E) 大学入学後の生活	1. 困難な状況	病気になったとき／困ったとき／人から騙された経験／問題に遭遇したとき	困難な状況におけるふるまい方で大人になったことが感じられると記述されている場合。困難な状況の内容としては、困ったことやトラブルといった漠然としたものや、病気になったとき、誰かに騙されたとき、など具体的な困難な状況が記されている場合もある。(5:0)
	2. 大学入学後の科目選択・手続き	学習する科目の変化／大学内外の機関での手続き・対応／セミナーの申込／大学入学後の授業選択／大学入学後のサークルの選択	大学入学後の大学内外でのさまざまな事務手続きを行うことで、大人を実感する場合。大学でのセミナーへの申込み、戸籍等の事務手続きについての言及があった。2件のみで、いずれも中国の学生によるものであった。(4:0)
	3. 大学入学後の生活	大学入学後の生活／大学進学による生活費の固定／学生会の部長になったこと／大学の中でのサークル活動・学生の活動／大学での学習・生活／親がお金を自由に使えるようにしてくれたこと	大学入学後の生活が、大人への変化のきっかけとして書かれている場合。サークルや学生自治会の活動への参加など、大学内での生活についてのものと、特に特定の場面ではなく、大学に入学したあとの日常生活全般について書かれているものがある。いずれも中国の学生の記述のみである。(7:0)
	4. 旅行	海外旅行／一人旅／自分で飛行機に乗って帰省できる／電車での一人旅／一人旅／海外旅行(ひとりで)	多くの場合ひとりで、帰省も含めた旅行をすることが、大人の実感や大人への変化のきっかけになっている場合。(4:1)
(F) その他	1. その他		家庭内に不慮の出来事があった、大学を休学した、就職活動で自分と向き合った、(具体的な内容は書かれていないが)手続き。(2:2)

注)「サブカテゴリーの定義・説明」内の括弧の中の数字は、中国：日本の順で、各カテゴリーに対応する回答の数を表している。

(2) 大人への変化の内容

Table 4 「大人への変化の内容」についての概念とカテゴリー

【カテゴリー】	＜サブカテゴリー＞	(概念)	サブカテゴリーの定義 (回答数 中国:日本)
1) 自立			
(1) 自立	a. 自立	自立心が芽生えた／自立した／他人に頼らない	自立したことが大人への変化として感じられている場合で、どのような側面での自立か、どのような相手からの自立か、といった詳細なことがらが述べられていない場合。(3:0)
(2) 生活の自立	a. 生活の自立	生活の自立／自立して生活する能力の向上／自分で自分のことができるようになった／自分でやらなければならないことが増えた	生活上の自立が大人への変化として感じられている場合で、特に具体的な生活上の活動内容が述べられていない場合。(4:3)
	b. 生活運営の自立	自分で支払いや買い物をしなければならなくなった／身の回りのことを自分でする／家事や手続きをひとりでできるようになった／家事をひとりでやる	生活上の自立が大人への変化として感じられている場合で、比較的具体性の高い生活上の活動内容が述べられている場合。(0:5)
(3) 経済的自立	a. 経済的自立	経済的に親に負担をかけないようにする／経済的自立は親のためにもなる／経済的に自立した	自分でお金を稼いで、経済的に自立することが大人への変化として感じられている場合。(2:1)
(4) 精神的自立	a. 精神的自立	親からの精神的自立	自立の側面のうち、精神的な面での自立に関して記述されている場合。(1:0)
(5) 親からの自立	a. 親からの自立	親の助けを借りずに問題解決／親からの自立／家族への依存が減った／孤独で無力でも誰も頼らせてくれない／親に信頼されてお金を自由に使わせてもらえるようになった／親に相談する必要がなくなる／親がやっていたことを自分でできるようになる／親任せから自分で決めるようになった／親ではなく自分で判断／生活で親に頼らなくても大丈夫になった	親からの自立が大人への変化として語られている場合。(9:4)
2) 自立の行動的側面			
(6) 自己選択・自己判断・自己決定	a. 自己選択・自己判断・自己決定	自分で選択し、自分の道を歩むべきであると考えようになった／親に相談する必要がなく決定できるようになった／自分で決めなければならなくなった／自己決定の自主性が高まった／自分で決断できるようになった／自分のことは自分で考えて決められるようになった／親ではなく自分で判断するようになった／自分の意思で決めることが多くなった／自分の意思で選択する余地が広がった	自分で選択・判断・決定することが多くなった、あるいはそのような場合に親などの他者の影響の度合いが低くなったことが大人への変化として感じられている場合。(5:3)
(7) 主体性	a. 自分で考えて行動	自分で考えてやらなければならなかったことが増えた	親の意見ではなく、自分で考えて行動するようになったことが大人への変化として感じられている場合。(0:1)
	b. 自分なりの考えを持つ	自分なりの物事の判断基準が備わった／自分の考えを持てるようになった	他の人の意見や判断基準ではなく、自分なりの意見や判断基準を持つようになったことが大人への変化として感じられている場合。(0:2)
(8) 自由さ・選択の余地の増加	a. 自由さ・選択の余地の増加	物ごとについて決定する自由さが増えた／自分の意思で決めることが多くなった／自分の意思で選択する余地が広がった／自分の財産について支配的な権利を持つようになった／アルバイトの結果、自由に使えるお金が増加した	様々なものごとに対する決定や行動についての自由度が増し、その結果選択の余地が増えていることが大人への変化として感じられている場合。(2:2)

3) 他者との関わりの変化

(9) 親・家族に対する理解・感謝	a. 親・家族に対する理解・感謝	親への感謝が深まる／親に対する感謝の気持ちを持てるようになった／家族に感謝するようになった／親・家族に対する理解・共感／親・家族に対する理解と大切さの認識	親や家族への理解が深まったり、親や家族に感謝の気持ちが生じる・深まることが大人への変化として感じられている場合。(2:3)
(10) 親・家族への思いやり	a. 親・家族への思いやり	帰省時に両親を思いやるようになった／弟に対して何かしてあげたいと感じるようになった／家族について理解し、話を聞くようになった／経済的に親に負担をかけないようにする／母親が心配するのを恐れて病気になったことを話さない／親に実用的なものを買い与える／家族への思いやり	親や家族のことを思いやる行動をとったり、思いやるようになったことが大人への変化として感じられている場合。(5:1)
(11) 社会・他者との関わり方の変化	a. 自分の意思表示をする	意思表示をする	社会や他者と付き合う上で、自分の意思表示をするようになったことが大人への変化として感じられている場合。(0:1)
	b. 他者から大人として受け止められる	自分の発言が他の大人に聞き入れてもらえるようになった	社会や他者と付き合う上で、自分の考えや意見が他の大人から聞き入れてもらえるようになったことが大人への変化として感じられている場合。(1:0)
	c. 大人らしいやりとり	社会・他者と大人らしいやりとりができるようになった	社会や他者と付き合う上で、大人らしいやりとりができるようになったことが大人への変化として感じられている場合。具体的にどのようなやりとりが大人のやり取りなのかについては書かれていない。(1:0)
	d. 他者との関係での抑制・コントロール	物ごとを行うのに分をわきまえるようになった／人づきあいにおいて自分の感情のコントロールができるようになる／人づきあいにおいて、短気ではなくなった	他者との付き合いの中で、感情などを抑制することができるようになったことが大人への変化として感じられている場合。(2:1)
	e. 他者受容・他者視点をとった付き合い方への変化	他者に目を向けるようになった／他人の気持ちを考えることができるようになる／自分と反対の意見を受け入れる／寛容になった	他者との付き合いの中で、他者の気持ちを考えたり、他者の意見（自分とは違う意見であっても）を受け入れることができるようになったことが大人への変化として感じられている場合。(3:1)
	f. 年長者との付き合い方への変化	親や年長者とのやりとりの変化／目上の人への態度の変化／目上の人との付き合い方がうまくなった／敬語が使えるようになった	年長者と付き合う上で、敬語の使い方も含め、コミュニケーションややりとりが以前とは変化することが大人への変化として感じられている場合。(1:2)
(12) 愛情に関する考え方の変化	g. 外見上の変化	化粧をするようになった	化粧をするようになった、などの外見上の変化が大人への変化として感じられている場合。(0:1)
	a. 他者との関係における愛情についての考え方の変化	愛情について深く知る／愛情に対する考え方の変化	家族に対するものなど、広く愛情に関する考え方の変化を大人への変化として感じている場合。(2:0)
	b. 恋愛に関わる変化	恋愛についての考え方の変化／恋愛について考えるようになった	異性との恋愛に関する考え方の変化を大人への変化として感じている場合。(3:0)

4) お金をめぐる行動と意識の変化

(13) 金銭管理	a. 金銭の管理	お金の科学的な管理を行う／固定された金額の生活費を管理する必要性／お金の管理をするようになった	お金の管理を行うことや管理の意識が高まることを大人への変化として感じている場合。(5:0)
	b. 金銭の使い方の面で成長	合理的な消費の意識／お金の使い方の面で成長	お金の使い方の面で大人への変化を感じている場合。(1:1)
	c. 金銭使用权・支配権	自分の財産について支配的な権利を持つようになる／多額のお金を自分で使用できるようになった	お金を自分のものとして所有する権利、使用する権利を得たことが大人への変化として感じられている場合。(2:0)
	d. 預金の引き出し	お金を自分でおろすようになった	お金を銀行から引き出すことを大人への変化として感じている場合。(0:1)
(14) お金の重要性の認識	a. お金の重要性の認識	お金の大切さ／お金の大切さを知った	お金の大切さに気付いたことを大人への変化を感じている場合。(0:3)

5) 責任			
(15) 自分に対する責任の増加	a. 自分の行動に対する責任	責任を持って行動できた／自分の人生だから自己責任で行動／責任を持たなければならないことの増加	自分と反対の意見を聞き、受け入れることができた。責任を持って行動をできたとき。(1:3)
	b. 自分の人生に対するプレッシャーの増加	自分の人生についてのプレッシャーの増加	生存と将来設計のプレッシャーが大きくなったこと、人生で何をすべきかを決める自主性が高まったこと、親や年長者とのコミュニケーションや付き合い方が変わったこと、きっかけは毎回の一人旅の後。(1:0)
(16) 家族・社会への責任の増加	a. 社会への責任の増加	社会的な責任／アルバイトなどでの責任感	社会に対して責任を感じるようになったことが大人への変化として記述されている場合。(1:1)
	b. 家族への責任の増加	弟に対して責任を感じるようになった／家族への責任感の増加	家族に対して責任を感じるようになったことが大人への変化として記述されている場合。(2:0)
6) 精神的変化			
(17) 自己の振り返り・自己認識の変化	a. 自己の振り返り・自己認識の変化	人生、生活、価値観などについて考えるようになった／自分自身への認識／就活で自分と向き合った	自分自身や自分の人生について振り返ったり見つめ直すことが、大人への変化として感じられている場合。(2:1)
(18) 精神面での変化	a. 意欲的になった	物ごとに取り組む意欲をもつ	精神的な側面での変化を大人への変化として感じている場合のうち、ものごとに取り組む意欲についてのもの。(1:0)
	b. 感情面での安定	感情面での安定	精神的な側面での変化を大人への変化として感じている場合のうち、感情の安定に関するもの。c <精神的に強くなった>とは異なり、具体的な困難に直面して安定しているわけではなく、感情にムラがなくなるといったこと。(0:1)
	c. 精神的に強くなった	病気になっても泣かなくなった／打たれ強くなった／くよくよしなくなった／精神的に強くなった	精神的な側面での変化を大人への変化として感じている場合のうち、精神的な強さに関するもの。何らかの困難や失敗に対して精神的に受け止められるようになった、という意味で、b <感情面での安定>とは異なる。(1:3)
(19) 考え方の変化	a. 考え方の変化	考え方の変化	考え方の面での変化が大人になったことの感覚につながっている場合のうち、特に変化の内容については触れていないもの。(2:0)
	b. 考え方が落ち着いてきた	考え方が安定してきた／熟慮するようになった／現象を正常なことかどうか考えるようになった／考え方が成熟	考え方の面での変化が大人になったことの感覚につながっている場合のうち、安定、熟慮傾向、成熟の方向への考え方の変化が述べられているもの。(3:0)
	c. 考えるうえでの視野の広がり	物事を客観的に見るようになった／視野の広がり／先の見通しを立てられるようになった	考え方の面での変化が大人になったことの感覚につながっている場合のうち、視点が現在の自分の視点に縛られない方向への考え方の変化が述べられているもの。(0:3)
7) 権利・資格の獲得			
(20) 権利・資格の獲得	a. 権利・資格の獲得	選挙権を持つようになったこと／たばこを合法的に喫えるようになったこと／合法的に飲酒できるようになったこと／自動車運転免許を持つようになったこと	選挙権や飲酒・喫煙、運転免許の取得など、法的に認められた年齢に達することで何らかの権利を獲得できたことが大人への変化として感じられている場合。(0:3)
8) 労働で得られるものの認識			
(21) 労働で得られるものの認識	a. アルバイトをする喜びと責任感の発見	アルバイトでの責任や喜びを見つけた	アルバイトをしている中での責任感が備わったこと、働くことの喜びを感じたことに大人とへの変化を感じている場合。(0:1)
	b. 他者のために働くことの道理や他者との付き合い方を学ぶ	他の人のために働くことの道理を学んだ／外の世界の人との付き合い方を学んだ	大学の中で他の学生のために働いている中で、働く際の考え方(道理)や関わりのなかった外の世界の人との付き合い方を学んだことに大人とへの変化を感じている場合。(1:0)
9) 将来について考える			
(22) 将来について考える	a. 将来の計画	将来の計画を立てる	将来についての計画を立てることが大人への変化として感じられている場合。(4:0)
	b. 将来に向けての準備	将来のことを考えて勉強や活動をするようになった	大学における学習やインターンシップなど、将来の準備として何らかの活動を現在行うようになったことが大人への変化として感じられている場合。(1:0)
	c. 将来についての心配	将来についての心配	将来の心配をするようになったことが大人への変化として感じられている場合。(1:0)

d. 過去、現在、未来について考える	過去、現在、未来について考えるようになった	過去、現在、未来にわたって人生を考えるようになったことが大人への変化として感じられている場合。(0:1)
e. 将来やりたいことについて考える	自分が将来本当にやりたいことについて考える	将来本当にやりたいことについて考えることが大人への変化として感じられている場合。(0:1)
10) 成長したとは感じない		
(23) 成長したとは感じない	a. 成長したとは感じない 成長したとは感じない／成長したと感じたことがない	成長したと感じていない場合。(0:2)

注)「サブカテゴリーの定義」内の括弧の中の数字は、中国:日本の順で、各カテゴリーに対応する回答の数を表す。

「大人への変化の内容」については、23のカテゴリー、46のサブカテゴリー、122の概念から構成されるものとなった(Table4)。以下では、Table4におけるカテゴリーを、カテゴリー間の関係から、さらに上位のコアカテゴリーにまとめたうえで、コアカテゴリーごとに結果を説明することとする。

1) 自立

「大人への変化の内容」という、経験的な大人への変化の中での「自立」については、「大人になることの意味」と同様に、(2)【生活の自立】、(3)【経済的自立】、(4)【精神的自立】、という自立の種類に関する3つのカテゴリーと、自立の対象を表す(5)【親からの自立】カテゴリーが抽出された。

(1)【自立】については、詳細な自立の内容が述べられていない場合であり、概念的には、(5)【親からの自立】、(2)【生活の自立】、(3)【経済的自立】、(4)【精神的自立】といった自立の種類を広く含んでいると考えられる。

その中で、(2)【生活の自立】については、大学入学後の生活上の自立が漠然と述べられている場合と、買い物、手続き、家事など、具体的な生活上の雑事についての自立が述べられている場合があり、前者を(2) a <生活の自立>、後者については(2) b <生活運営の自立>としてサブカテゴリーにまとめた。前者については日中の学生ともに回答されていたが、後者については日本の学生のみが記述していた。「大人になることの意味」における(b)【生活の自立】で日本の学生の回答が見られなかったことと対照的である。

(3)【経済的自立】については、中国の学生の記述は、概念で言えば(経済的に親に負担をかけないようにする)(経済的自立は親のためにもなる)といった内容であり、(10)【親・家族への思いやり】から経

済的自立が生じていることが分かる。ただし、ここで言う「経済的自立」は、完全に経済的に自立しているわけではなく、部分的にアルバイトなどにより家庭の負担を減らすといったものである。

(4)【精神的自立】については、このカテゴリーに対応するのは、直接的には、「病気になっても、以前のように親に電話して泣くことはなくなったし、自分でその痛みを引き受けなければならないことも分かっている。」(中国・5)という1件の記述のみである。しかしながら、「大人になることの意味」の分析においても、カテゴリーとして抽出されており、また、たとえば、(7)【主体性】を含む心理的な変化や(6)【自己選択・自己判断・自己決定】など、様々なカテゴリーにわたって、精神的自立に関連した内容が含まれており、さらに自立の多様な側面をとらえるうえでも重要と考えられたため、独立したカテゴリーとした。

また、自立の対象(誰からの自立か)を示す、(5)【親からの自立】については、単に親から自立したという状況のみを淡々と記述したもののほかに、親からの自立に伴う心情を含んだものもあり、たとえば「多くのことを自分で決められる。もう親に相談する必要はない。」(中国・43)といった、一種の束縛からの解放感が表されているものや、逆に「生活の面では、大学に入って家を出た後は、孤独で無力な状態でも誰も頼らせてくれません。」(中国・39)のような、本当は頼りたくても、自立していかななければならないという覚悟のような表現も見られる。

2) 自立の行動的側面

「大人への変化の内容」における、(6)【自己選択・自己判断・自己決定】、(7)【主体性】、(8)【自由さ・選択の余地の増加】の3つのカテゴリーは、「大人になることの意味」と同様に、自立の「行動的な側面」としてまとめることができる。

このうち、(6)【自己選択・自己判断・自己決定】については、(5)【親からの自立】でも挙げた「多くのことを自分で決められる。もう親に相談する必要はない。」(中国・43)のように、一種の束縛からの解放として捉えている場合と、「大学に入ってから授業やサークルの選択など、いろいろなことを自分で決めなければならないとしたし、自分のことは自分で責任を持つべきだと思っている。」(中国・16)のように義務のようなものとして捉えている場合、「自分に関係あることはちゃんと自分で考えられるようになった。」(日本・30)のように、判断・決定能力の向上として捉えている場合があると思われるが、それら3側面の切り分けが難しく、まとめてひとつの категорияとした。

(7)【主体性】のcategoryにおける記述は日本の学生のみであり、「大人になることの意味」において(h)【主体性】の日本の学生の回答が多かったのと同様の傾向であった。自分で積極的に行動するという意味合いとともに、「他者とは違う自分の考え」であることにも重点があり、その意味で、アイデンティティの発達とも関連が深い。

(8)【自由さ・選択の余地の増加】は、様々なものごとに対する決定や行動についての自由度が増し、その結果選択の余地が増えていることが大人への変化として感じられている場合である。たとえば、「高校生までは学校での勉強や実家での生活など、自分の意思と関係なく自分の生活を規定する要素が多くあったため、それに従ってやることをやっていればよかったが、大学生になってからは自身の選択の余地が広がり、いろいろなことを自分の意志で決める場合が多くなった。」(日本・48)のように、(5)【親からの自立】の結果として(8)【自由さ・選択の余地の増加】が生じたと述べられているものも多く(中国の学生の記述にも明確には書かれていないものの、同様のニュアンスが読み取れるものがある)、また「高校時代と比べて、自由に使えるお金が増える(アルバイトをして)」(日本・50)のように、アルバイトによる(3)【経済的自立】と関連して述べられているものもある。

2) 自立の行動的側面全体について言えば、「大人になることの意味」にくらべれば明確ではないものの、(7)【主体性】においては日本の学生の記述が多く、(6)【自己選択・自己判断・自己決定】においては中国の

学生が多い。サブcategoryには分けていないものの、選択、判断、決定のうち、判断に関する概念は(親ではなく自分で判断するようになった)のみであり、日本の学生の記述1件のみであった。この点も「大人になることの意味」における(f)(2)＜判断力が増すこと＞と似た傾向が見られた。

3) 他者との関わりの変化

他者との関わりの変化が「大人への変化の内容」として挙げられているものについては、(9)【親・家族に対する理解・感謝】、(10)【親・家族への思いやり】、(11)【社会・他者との関わり方の変化】、(12)【愛情に関する考え方の変化】の4つのcategoryから構成されている。

(9)【親・家族に対する理解・感謝】については、後述する(10)【親・家族への思いやり】が相手への働きかけ(行動)も含むのに対し、このcategoryは認識上の問題にとどまるものであり、能動的な行動やそれを引き起こす可能性を持ったものではない。日本の学生の場合は、3件いずれにも「独り暮らしを始めたこと」への言及が含まれており、ひとり暮らし開始後、過去の親や家族がいた時を振り返って、多くは生活上の雑事を家族が引き受けてくれていたことに対して、感謝の気持ちが生じている。一方、中国の記述には全て「両親や家族への理解」という内容が含まれ、家族への理解の深まりが、感謝の念のきっかけになっている。

(10)【親・家族への思いやり】は、親や家族のことを思いやる行動をとったり、思いやるようになったことが大人への変化として感じられている場合であるが、(9)【親・家族に対する理解・感謝】とは異なり、たとえば「お金を貯めて、生活のために実用的なものを親に買い与える」(中国・45)のように、実際に行動上の働きかけ(または働きかけの意図があること)を含み、能動的なものである。日本の学生の記述は1件のみであり、「家族を思いやる」(日本・8)といった漠然としたものである。中国の学生の(10)【親・家族への思いやり】への言及は多く、「例えば、弟に対してより責任を感じ、彼が道なき道を歩めるように何かしてあげたいと思うようになったこと」(中国・28)といった家族への責任感の側面と、「自分でアルバイトを見つけ、家族の負担を増やさないように」(中

国・48)、「たとえ病気やトラブルに見舞われていても、母親が心配するのを恐れて母親にはそのことを話さない」(中国・25)といった「気づかい」の側面がある。

(11)【社会・他者との関わり方の変化】は、社会や他者と付き合う上でのコミュニケーションややりとりの変化が大人への変化として感じられる場合だが、学生側の変化だけではなく、周囲の大人の受け止め方の変化((11) b <他者から大人として受け止められる>)も含まれる。

また、(12)【愛情に関する考え方の変化】については、全て中国の学生の回答であり、恋愛についての考え方が変化する以外に、家族との愛情や友情なども含め、広く愛情に関する変化についての記述がみられる。

4) お金をめぐる行動と意識の変化

お金の管理・使用、あるいは、お金に対する権利や意識に変化が生じたことが大人への変化の経験として記述されていた。この「お金をめぐる行動と意識の変化」は、「大人になることの意味」における「1) 自立」「2) 自立の行動的側面」および「(I)【自律】に関連するものが、実際の大人になることの経験の中では、「金銭」という具体的なものの自律的な管理やその意識という形で表れたものと言える。

(13)【金銭管理】については、(13) a <金銭の管理>と(13) b <金銭の使い方の面で成長>という「自律」に関するカテゴリと、(13) c <金銭使用权・支配権>と(13) d <預金の引き出し>という「自立」に関するカテゴリが含まれている。(B) 2 <親元を離れること>によって生活費の金額が固定されるという「自立」に関連したもの(たとえば、「大学に進学し、毎月の生活費が決まっていること。お金に対する一定の支出の計画を持つ大人に成長する必要性を自分に自覚させること。」(中国・10))と、(A) 1 <アルバイト>などにより自分でお金を稼ぐようになって、(14)【お金の重要性の認識】が生じたことによるもの(「お金の使い方など、アルバイトを始めてから成長した。」(日本・25))が見られた。

中国の学生の記述の中では「自律性が高まり、自分の合理的でない消費の考え方をコントロールできるようになること」(中国・10)や「急に大人になったような気がしてくる。その代表的な出来事のひとつが、

お金の管理を科学的に行うことだ。」(中国・7)のように、大人の金銭管理や消費のあり方として合理的であることに言及されているのが特徴的であった。また(13) a <金銭の管理>の回答は中国の学生のみであるのに対し、(13) b <金銭の使い方の面で成長>や(13) d <預金の引き出し>といった具体的な生活の中での金銭管理については日本の学生の回答も見られる。

(14)【お金の重要性の認識】については、きっかけとしては、直接的にはアルバイトを始めたことが挙げられているが、「親のありがたみ(特に母親)、お金の大切さがすごく分かるようになった。親に対する感謝の気持ちがすごく持てるようになった。」(日本・14)のように、親への感謝が同時に書かれている場合もある。このカテゴリについては、中国の学生の言及はない。

5) 責任

「責任」については、その責任の対象が自分であるか家族・社会に対するものであるかに応じて、(15)【自分に対する責任の増加】と(16)【家族・社会への責任の増加】の2つのカテゴリに分けて構成した。具体的な経験についての回答であるため、「大人になることの意味」における(n)【責任の増加】のような責任の対象に言及しないものは見られなかった。

(15)【自分に対する責任の増加】は、自分自身の責任のもとで行動しなければならないことがらの種類が増えたり、ものごとを行う際の自分の責任の程度が増加したことを大人への変化として感じている場合である。「自分の人生なんだ」と意識し、自己責任で行動するようになった。」(日本・34)のように、積極的に責任をもって行動していく場合もあれば、それを大人にとっての義務のようなものとして感じる場合(「大学に入ってから授業やサークルの選択など、いろいろなことを自分で決めなければならなくなったし、自分のことは自分で責任を持つべきだと思っている。」(中国・16))もある。後者については、「大人になることの意味」における自立および自立の行動的側面と責任との関係と同様である。また、決定することをプレッシャーに感じる(「生存と将来設計のプレッシャーが大きくなったこと」(中国・42))場合も、自分に対する責任感の表れとしてこのカテゴリに含めた。

(16)【家族・社会への責任の増加】は、社会や家族に対して責任を感じるようになったことが大人への変化として記述されている場合である。日本の学生の記述は1件のみであり、その内容も「バイトなどでの責任感」(日本・8)という内容であったため、(15) a <自分の行動に対する責任>の面も含んでいるが、職務内容によっては求められる社会に対する責任が高い場合も考えられるため、このカテゴリーに含めた。中国の学生の記述には、家族に対する責任感に関する記述が含まれている(2件)。

6) 精神的変化

精神面での変化が大人への変化の経験として記述されているものには、(17)【自己の振り返り・自己認識の変化】、(18)【精神面での変化】、(19)【考え方の変化】というヴァリエーションが見られた。このうち、(17)【自己の振り返り・自己認識の変化】は、自分自身や自分の人生について振り返ったり見つめ直すことが、大人への変化として感じられている場合であり、(18)【精神面での変化】は、感情や意欲、性格など、考え方以外の変化、(19)【考え方の変化】は考え方での変化になる。

(18)【精神面での変化】では、(19) b <考え方が落ち着いてきた>と同様の、(18) b <感情面での安定>という安定や落ち着きの面のほかに、打たれ強さ、くよくよしない、など(18) c <精神的に強くなった>ことも大人への変化として挙げられていた。

(19)【考え方の変化】

考え方の安定、熟慮傾向、成熟といった(19) b <考え方が落ち着いてきた>という側面と、物事を客観的に見たり視野が広がる、先の見通しを立てるといった、いま・この現象に縛られない、時間軸も含んだ(19) c <考えるうえでの視野の広がり>の側面がある。特に後者については、「大学に入り、様々な人と会うことで、自分の視野が広がった(様々な価値観に触れた).」(日本・5)や「先の見通しが立てられるようになった。きっかけはバイトで先輩が抜けて危機感を感じるようになった。」(日本・40)のように、大学入学後に会う他者からの影響を受けたものも多い。また、(19) b <考え方が落ち着いてきた>が全て中国の学生の回答なのに対し、(19) c <考えるうえでの視野の広がり>は全て日本の学生の回

答であることから、中国の場合には安定や落ち着きが大人への変化の基準となるのに対して、日本の場合には見通しや視野の広さが基準である可能性がある。

7) 権利・資格の獲得

選挙権や飲酒・喫煙、運転免許の取得など、法的に認められた年齢に達することで何らかの権利を獲得できたことが大人への変化として感じられている場合であり、カテゴリーでは(20)【権利・資格の獲得】のみである。

日本の学生のみが記述しており、中国でも、未成年の飲酒・喫煙は禁止されており、運転免許取得と選挙権・被選挙権の年齢制限は18歳以上ではあるものの、このカテゴリーでの記述はない。この点は、「大人になることの意味」において、中国の学生にも(s)【権利の獲得・享受】に関する記述があったことと対比して考えてみると興味深い。また、「大人になることの意味」ではカテゴリーとして抽出された(t)【義務】に対応するものが、「大人への変化の内容」では見られなかった。

この点は、「大人になることの意味」では、中国の学生においては(s)【権利の獲得・享受】は(t)【義務】と対の概念として考えられていたものであり、「大人への変化の内容」という具体的に経験したことがらについて記述する場合には、大学生の段階ではまだ(t)【義務】の部分が具体的に実現できていない分、(s)【権利の獲得・享受】も大人の実感としてあまり感じられない可能性も考えられる。

8) 労働で得られるものの認識

賃金等の報酬の有無にかかわらず、社会や他者のために働くことによって、自分にも何らかのスキルの向上や精神面での変化などの獲得するものがあり、そのことが大人への変化の認識として記述されている場合で、カテゴリーとしては(21)【労働で得られるものの認識】のみであった。

日本の学生はアルバイトを通して獲得する責任感や働くことの喜びについて言及しており、中国の学生は大学の中の学生自治会の部長になったときに学んだ、他の人のために働く際の働き方、よく知らない人との付き合い方について言及している。アルバイトが大学生の世界から大人の仕事の世界への入り口とし

て、大学の自治会での仕事も「外の世界（外界）」の人とのやりとりを含むものとして認識されており、日中ともに、大人の社会に近い場や関係での関わりとして考えられている。ただし、学生がアルバイト従事割合の高い日本に対し、中国の学生の従事割合は低いと考えられ、実際に利益を上げなければならない大人社会の仕事（アルバイト）に参加している日本の学生と大学の中の仕事から大人社会の仕事を疑似体験する中国の学生には、そこで学ばれるものにも違いがある可能性は高い。また、その意味でも、中国の学生時代は日本と比較して、大人社会で活躍するための「準備期間」の意味合いが大きいと考えられる。

9) 将来について考える

自分の将来について考えることが大人への変化として感じられている場合であり、(22)【将来について考える】のカテゴリのみが含まれている。将来の計画や準備のほかに、将来について心配することを含む。日中の学生の将来の計画・準備に関する記述内容には、微妙な違いがある。たとえば、「生存と将来設計のプレッシャーが大きくなったこと」（中国・42）、「私たちは成績のために一生懸命勉強するのではなく、将来の発展のために勉強するようになり、多くの人々があらゆる種類のインターンシップやクラブ活動に参加するようになった」（中国・40）に見られるように、中国の学生の場合、将来の生計や生き方に関するものであり、「8）労働で得られるものの認識」でも述べたように、大学生活は、まだその準備段階と考えているように思われる。日本の学生の場合には「大学に入って、周りに友達にはよく考えたり自分の未来をしっかりと見据えている子が多かったため、その人たちと話をする中で、過去、現在、未来について考えるようになった。」（日本・5）、「自分が将来本当にやりたいことについて考えるようになった。」（日本・12）といった、自分のアイデンティティや自分探しにも関するものであった。

10) 成長したとは感じない

成長したと感じていない場合であり、(23)【成長したとは感じない】のひとつのカテゴリで構成される。

4. 考察

4-1. 成人形成期初期における日中大学生の大人になることの意味と成人感

本研究では、異文化交流授業の過程で記述した「大人になることの意味」と「大人になること・成長の主観的感覚・きっかけ」についての自由記述データを分析することにより、成人形成期（emerging adulthood）初期にある現代の大学生の成人期への移行のあり方を、観念的な理想の大人と実際の経験、日本と中国といった様々な比較を通じ、多面的に検討した。

「大人になることの意味」と「大人になること・成長の主観的感覚・きっかけ」の2つのデータにおいて、また、日本と中国の学生の記述について、各カテゴリにおける記述の有無・多寡はあるものの、11のコアカテゴリからなる基本的な構造は大きく違っておらず、これらのカテゴリは、比較の際の基本的な基準・枠組みとしても考えることが可能だと思われる。

まず、「大人になることの意味」における、ポイントとなるカテゴリ間の関係を模式図的に表すとFigure1のような構造が考えられる。中国の学生の記述からは、観念上は、自立—責任および計画性、権利—義務、自由—自律の補完的な関係が見られ、たとえば自立するからには責任を負わなければならない、権利を得るからには義務を果たさなければならない、として、それらの補完的な関係の両側を同時に果たしている場合が「理想的な」大人になることとして考えられている。一方で、日本の学生についても、カテゴリの種類としては同様のものが見られるにも関わらず、自立、（自分への）責任、権利、判断力、主体性、自律といったカテゴリはお互いが補完的な関係をとることなく、大人としての自己・アイデンティティの形成の要素となっている。

また、大人へと移行する際の親および大人の社会との関係の変化のあり方も、日本と中国でそれぞれに特徴の違いが見られた。親・家族から社会へ、という流れは、中国の学生にとっては、単に親から離れて社会へ移行するのではなく、たとえば「大人になることの意味」の分析の中では、(j)【守る・育てる立場への変化】

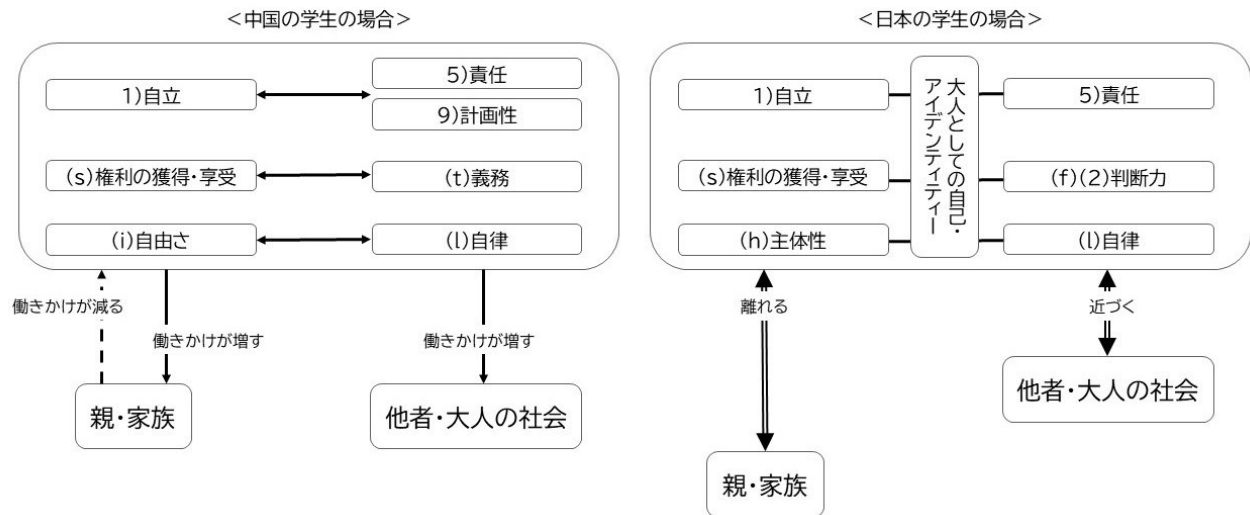


Figure 1 「大人になることの意味」についての日本と中国の違い

などに見られるような、他者から働きかけられる・守られる・育てられる立場から、働きかける・守る・育てる立場への変化として考えられる（この点については、「大人への変化の内容」も含めて後述する）。それに対して、日本の学生の場合には、親からは心理的にも、物理的にも距離をとり、大人の社会へと近づいていくことが大人になることとして考えられており、特に親や家族への働きかけの方向の変化といった記述は多くない。

今回の2つのデータに共通して、「自立」は言及頻度の多いものであった。「大人への変化の内容」では、日中の学生ともに、高校から大学への進学にともなう(5)【親からの自立】が、成人感・成長感の大きな源となっていることが、関連した回答の多さからうかがえた。また、「親からの自立」が、後述するように細かくは日本と中国の違いがあるものの、大枠では、「生活の自立」、「精神的自立」、「経済的自立」という3つのカテゴリーにまとめられるという点も、日本と中国の学生に共通していた。こうした「自立」の特徴は、実際の経験だけではなく「大人になることの意味」という大人についての考え方の面でも同様であった。

大石・松永（2008）は自立概念の尺度化に関する先行研究を概観したうえで、先行研究に共通して見られる側面として「心理的自立」「経済的自立」「社会的自立」の3側面を挙げ、さらに「生活身辺自立の側面」を含む研究もみられるとしている。本研究における自由記述の分析からも、日中の学生ともに同様の3側面が見られ、成人形成期初期にある今回の日中の学生

たちにとって、こうした自立の3つの側面での変化が、成人感・成長感を持つうえで重要なものであることが分かる。

逆に、「大人になること・成長の主観的感覚・きっかけ」では、(A)『大人の社会とのつながり』については、アルバイトや就職活動を通じて、成人感・成長感を得たという記述は見られるものの、日中ともに自立に関するものに比して多くはない。それに対して、Figure1のようにまとめられる「大人になることの意味」では、日本と中国、双方の学生において「社会参加」と「親からの自立」が大人になることとして意識されている。

このように、観念的には親から社会への移行が大人になることの理想と考えられているにも関わらず、実際の日常生活での経験では「社会への移行」の部分が多く見られない、という点については、学生たちが大人への移行においてどのような段階に位置づくか、という点から考えることができる。18歳～29歳を成人形成期と考えれば、今回の交流授業と調査への参加者の平均年齢である19歳～20歳の時期は、最も初期の段階であり成人形成期の入り口と言える。そうした年齢の面からも、中国の学生が、成人期への移行、大人社会への参加について意識が高いとしても、今回の日中の学生の多くは共通して、まだ本格的には取り組む段階ではなく、親からの自立を中心的な課題として取り組みつつ、あるいはそれをやっと達成したばかりの時期で、大人への移行を模索・準備し始めた段階にあると考えられる。

また、自由記述データの中で結婚や出産に関する言及は見られず、就職に関しても言及は少ない。このことから、先行研究と同様に、かつては成人感獲得の重要な基準となっていたそれらのライフイベントも、日中の多くの学生にとって、成人感・成長感の基準にはなっていないように見え、この点でも日本と中国の学生の傾向は共通している。

これらの点から総合的に考えれば、ある面では中国の学生の方が大人の社会への移行への意識が高いように見えるものの、日本の学生も中国の学生も、大きく見れば、親や家族からの自立がこの時期の中心的な発達課題であり、同時にまだ大人の社会は想像の世界のものにとどまり、実際の生活における大人の社会への移行についてはまだ本格化していない段階といえることができる。

4-2. 生活の中での成長と成人感

「大人になること・成長の主観的感覚・きっかけ」自由記述データの中では、「大人になることの意味」のデータに比べ、将来のイメージ・計画や精神的な変化などと関連付けながら大人になることの実感や経験が記述されることは少なく、現在の具体的な日常生活の中での成人感・成長感のみが描かれていることが多い。また、たとえ精神的な面について回答される場合でも、具体的な出来事との関連の中でそうした変化が描かれていることが多い。

溝上（2010）は、1990年代以降の日本の学生が、それ以前の時代の学生と比べれば、中学高校時代からキャリア教育・キャリア形成支援を受け、その影響を受けて将来や社会への意識が高まっているものの、就職活動が始まるまでの日常生活は以前と変わらず、就職活動を開始した時の自己理解や人生設計もぼんやりしたままであることについて論じ、「日常生活」という意味でのライフと「人生」という意味でのライフが分離していること、将来の自己像を日常生活や他者との関係性の中で試してみる「役割実験」（Erikson, 1959）が十分に行われていないことをその原因として挙げている。今回の「大人になること・成長の主観的感覚・きっかけ」データでも、「日常生活」としてのライフが成人感・成長感とのつながりを持って記述

されることが比較的多く、「人生」としてのライフは前面には出てきていない。逆に「大人になることの意味」については、「9」計画性」のコアカテゴリーにおける記述の多さからも分かるように、中国の学生の「人生」としてのライフへの意識は日本に比べて高いように思われるが、それが成人感・成長感の自由記述データに直接的に表れることは少なく、記述の中心が「日常生活」としてのライフが中心になる点は日本と同様である。この点で言えば、溝上（2010）が述べるところの「ぼんやりしたまま」な自己理解や人生設計は、実のところ表面には表れにくいところでの、細かな成人への移行を内包している可能性もある。

たとえば、金銭管理の面では「大学に進学し、毎月の生活費が決まっていること、お金に対する一定の支出の計画を持つ大人に成長する必要性を自分に自覚させること、自律性が高まり、自分の合理的でない消費の考え方をコントロールできるようになること。」（中国・10）、人間関係の面では、「大学に入り、様々な人と会うことで、自分の視野が広がった（様々な価値観に触れた）。」（日本・17）、「目上の人に対しての対応が以前よりもうまくなった。敬語がきちんと使えるようになった。」（日本・22）など、具体的な生活の中での出来事や活動が学生たちの大人への成長の実感に結び付いている。また、大学を中心とした学生たちの生活の中でも、大人の社会に半歩踏み出した場とも言えるアルバイトでは、大人への成長を実感することも多く、「初めてのアルバイトで接客業をしていて、お客様への対応や心遣いなど、経験したことなかったお店を回す仕事の中で、責任や喜びを見つけることができた。」（日本・5）「周りが見えるようになった（バイト）打たれ強くなった（バイト）」（日本・43）といった記述が見られる。

さらにいえば、日本の学生の場合、生活上の自立について描写が中国より細かく、たとえば、中国の学生の場合、同じ生活の自立について「自立して生活する能力が大きく向上した。」（中国・14）、「大学に来て寮に住み、1人で生活し、1人で自分の面倒を見る。」（中国・38）とおおざっぱな表現なのに対して、日本の学生の場合は「実家を出て、日用品から公共料金まで自分で支払いや買い出しに行くこと。」（日本・51）、「一人暮らしを始めたことで、様々なこと（家事とか、様々な手続き）を一人でできるようになった。」（日本・

28)と具体的な活動が記述される傾向がある。また、自立が、「大人になることの意味」でも「大人への変化の内容」でも、生活の自立と経済的自立、精神的自立の3つのカテゴリーに分かれており、そのうち「大人への変化の内容」における(2)【生活の自立】のサブカテゴリーである(2)b<生活運営の自立>は、日本の学生のみ記述があり、中国の学生にはない。

渡邊(1995)は、女性の自立という視点から考えた場合、先行研究における自立の捉え方が西欧的で男性視点のものとなっており、自己主張能力・対人関係能力だけでなく、生活能力の向上による自立が低く評価されてきたことを問題として指摘している。今回の成人形成期初期の学生についても、まだ大人社会へと完全には踏み出していないこの時期の学生にとって、生活能力の向上や生活の中での様々な事象から学生たちにとって成人感の獲得に与える影響は大きいと思われる。従来は成人への移行や自立の研究の中であまり重視されてこなかった、こうした生活の中での細かな学生たちの成人に向けた変化を検討していくことは、欧米とは違った形での日本や中国における青年から成人への移行を捉えるうえでは重要であると思われる。

本研究の結果では、日本の学生も中国の学生も、同様に生活の中から成人感・成長感を得ていることが分かるものの、日本の学生の方が生活面での出来事から成人感・成長感を得ている場合が多いように思われる。この背景には、寮ではなく、独りで部屋を借りて暮らす学生が多く、学校外での人間関係も多様であり、またアルバイトも中国に比べれば多くの学生が行う日本の方が、より具体的なレベルでの生活での自立と成人感との結びつきが強くなった可能性が考えられる。

同時に、このことは、日本における社会化や大人になることにとって、生活運営的な能力の向上の重要性が高いことを意味している可能性はある。また、中国との比較で考えれば、より欧米寄りの自立や成人感のあり方を持つ日本の学生も、生活面での重視の度合いの点から考えれば、欧米とはまた違った成人形成期の移行の過程を持っているとも考えられる。

4-3. 「情」の再考と対人関係の組み直し

「大人への変化の内容」における中国の回答の中で

興味深いのは、大学生活の中での(日本的に見れば)比較的些細な決定場面についても、その決定を自分で下せることに成長を感じている点である。たとえば、「大学に入ってから授業やサークルの選択など、いろいろなことを自分で決めなければならなくなり、自主性が非常に高くなった」(中国・16)など、それほど負担や重要性が高くないように見える選択にも、その選択を自分ができることに成長を感じている。もちろん、実際にそれらの選択が日本に比べて難しい可能性もあるが、そうした日本の感覚では些細な選択が、中国の学生にとっては日本とは違った意味を持っている可能性も考えられる。

成人感のきっかけになる出来事として、(D)1<大学入試時の進路選択>を挙げたのは2名で、いずれも中国の学生であった。「将来の計画、大学入試で自分の希望進学先を記入し、この決断が後の人生に与える影響を実感したこと」(中国・6)という回答からは、進路選択が学生自らの意思で行われたことがうかがえるが、その一方で、同様に進路を自ら決めたと書かれている回答の中には「高校時代、親は私の個人的な意識を育てることに気を配り、私は自分で文系と理系を選び、大学入試の志願者も自分で記入した。大学の専攻も都市も自分で選んだ。しかし、両親はあらゆる活動において、常に私に一定の影響を与えていた。例えば、私は政治や法律に才がなかったし、両親は私に教員養成の勉強をさせたかったので、私は長い間考えた。」(中国・50)というものもある。この後者の回答からもうかがえるように、中国の高校生が「最終的には」自分で進路の選択・決定を行っていたとしても、その決定までの過程では、親の関与度は非常に高く、日本と違い年に1回の全国統一の試験とその際の進路選択で進学先が決まってしまう中国の大学入試の場合には、そこでの選択には一家の命運がかかる可能性もあり、時には祖父母まで巻き込んで家族全体で大学入試に挑むこともある(渡邊, 2009)。

そのような高校までの親・家族との関係を背景として考えれば、親・家族の影響が及ばない大学入学後の生活における諸々の意思決定・選択は、たとえそれが一見些細なものであっても、多くの中国の学生にとっては、新鮮かつ重みのある出来事なのかもしれない。

こうした大学入学後の選択や意思決定が、自分自身で行えるようになることは、(5)【親からの自立】と

して考えることができ、また自立が成人形成初期にある日本と中国の学生にとって重要な発達課題であることについてはすでに述べたが、一方で、ここで言う中国の学生の「自立」を、親との関係が離れていくイメージでとらえることには留保が必要である。たとえば、「大学の前期には、親が私のデビットカードに1万円を入れてくれて、自由に使えるようにしてくれたので、本当に親の信頼を得て、大人になったという実感がありました。」（中国・50）といった中国の学生の記述は、金銭の使用が自由に行えるようになるという点で「経済的自立」を表すものと言えるが、それが親との信頼関係の上で成り立つものと学生はとらえており、親との結びつきが切れているわけではない。

結びつきが切れていないどころか、回答の中には、むしろ学生の側から積極的に親・家族に関わっているように見えるものもある。

ひとつは、(16) b【家族への責任の増加】のカテゴリに対応するものであり、たとえば「弟に対してより責任を感じ、彼が道なき道を歩めるように何かしてあげたいと思うようになったこと」（中国・28）や「家族への責任感の高まり」（中国・51）など、以前の、親から責任を持って育てられていた立場から、逆に親や家族に責任を持つ立場へと移行しつつあるようにも見える。また、「お金を貯めて、生活のために実用的なものを親に買い与える。」（中国・45）のように、(10)【親・家族への思いやり】が日本に比べて中国の学生の回答に多くみられる。これらのことから、中国の学生の場合、（回答数として多いわけではないので）まだはっきりとした形では現れていないものの、親や家族から責任を持って育てられ、守られている高校までの立場から、矢印の向きが逆転する形で、親や家族に責任を持ち、家族を守る存在へと移行していくように見える。

北京市の大学生を対象に調査を行った Nelson, Badger, & Wu (2004) の研究では、先行研究 (Arnett, 2003) においてアメリカの学生の 16% が「親を経済的に支えることができるようになること (become capable of supporting parents financially)」を大人の基準として選択したのに対して、Nelson et al. (2004) の調査では、中国の学生では 89% が選択したことを述べ、これを儒教の「孝」の伝統と中国が集団主義的な文化にあることから論じて

いる。儒教と集団主義にその原因を求めることの是非は措いておくとしても、将来的には親や家族を支えることが成人への移行の目標になることについては、本研究の結果とも同様の結果が得られていると思われる。

さらに、全体的に見れば、中国の学生の回答には、「情」が関係するものが多く見られ、それが直接的に表れたものとしては、たとえば、「寛容さ、肉親への愛情、健康の意義についてより深く知ようになった。」（中国・40）「恋愛における愛情に対する考え方；失恋；社会的責任」（中国・33）など、(12)【愛情に関する考え方の変化】のカテゴリに該当する回答は全て中国の学生のものである。「情」が、常に何らかの人間関係に付随するものであることを考えれば、ここで「情」についての考え方が改めて考え直されているということは、そのまま人間関係のあり方の見直しが行われているとも言うことができる。

このように、中国の学生の回答の傾向として、自立が人間関係の希薄化や（主に親から）離れることを意味しておらず、結びつきは依然として続いた状態であり、守られる立場から守る立場へのベクトルの逆転、あるいは人間関係に付随する「情」の再考といった形で、人間関係が再構築されていくように見える。

4-4. 今後の課題

全体的にまとめれば、まだ成人への移行が本格化していないものの、学生たちにとっての「大人になること」をめぐる考え方や行動には、日中それぞれの国の社会文化的状況を反映しながら、特徴的なものがあり、将来への意識は比較的高くないものの、アイデンティティや自己実現を生活の運営の中から積み上げていく日本と、将来への意識は高く、これまでの「守られる」立場から「守る」立場へと人間関係の再構成を徐々に行っているものの、将来に向けての具体的活動がそれほど活発ではない中国という対比が見られる。

福澤・王 (2015) は日中の大学4年生を対象に調査を行い、その中で就職活動の際に重視する条件について調査したところ、中国の学生で最も多かったのは「会社の将来性・安定性」で、以下「賃金」「福利厚生」と続くが、日本では「仕事の内容」が最も多く、「会

社の将来性、安定性」,「労働時間、休日、休暇」であった。中国で「安定性」や「賃金」が重視され、日本において「仕事の内容」が重視される背景も、本研究の結果得られた、家族を支えなければならず、おそらくは家族からの期待も受けながら将来のことを意識している中国と、家族からは独立し、自己実現を重視する日本、という結果とも対応しているように思われ、まだ就職活動が本格化していない時期の大学生であっても、活動が本格化する4年生の時期の日中の違いの、萌芽になるようなものが見られたことになる。

本研究の結果は、成人感に関する先行研究の結果と重なるところも多い。たとえば、Arnett (1994) は、多くの先行研究を参照したうえで、アメリカの多数派の文化の中では、「自己の責任を受け入れる」「自立した意思決定を行う」「経済的自立」が、成人への移行にとって最も重要な3つの基準であると述べているが、本研究の中でもこれらの基準はカテゴリーの中に見られるものであった。また、日本国内において本研究と同様に学生による自由記述の内容の分析から青年期の成人感について研究した菊池・安達、(1985; 1986)においても、成人感の発生因として、経済的自立、親からの独立、精神的成熟の自覚、社会人としての自覚・責任感の自覚、形式的身分認知、大人の肯定、子ども性の否定が挙げられており、多くは本研究のコアカテゴリーとも類似している。また、中国における、守られる立場から守る立場への移行についても、Nelson et al. (2004) の調査結果と重なることについてはすでに述べた。

一方で、日本・中国ともに、生活の自立、自律をは

じめ、先行研究とは異なるカテゴリーが得られただけでなく、それらの関係についても、中国の学生については、「大人になることの意味」におけるカテゴリー間の補完関係や「経済的に親を支える」(Nelson et al., 2004) だけでなく、次世代の子どもの育成も含んだ、より幅広く育て守る意識の存在など、これまでの先行研究では指摘されてこなかった点を見出すことができた。また、日本における生活の自立の内容に表れるような、より具体的なレベルでの大学生の大人への移行についての検討を行うことができたのも、本研究が、既存の研究枠組みやIDEAのような既存の尺度を用いて調査を行うのではなく、学生たちの内側の視点に基づいた自由記述からボトムアップに検討を行った成果だと考えられる。

すでに述べたように、成人形成期における移行のあり方や「大人になること」をめぐる考え方は、社会文化的な状況の変化にともない、大きく変化していく可能性は大きい。調査が行われた時期は2012年であり、10年あまりの間に、日本と中国の学生をとりまく環境も大きく変わってきている。今後は今回の研究で得られた知見について、さまざまな形での検討を繰り返して行っていくことによって、成人形成期初期における学生たちの考え方の変化について引き続き検討していく必要はあるだろう。

謝辞

本研究はJSPS科研費 JP22330190, JP23K25675 の助成を受けたものです。

引用文献

- [1] Arnett, J. J. (1994). Are college students adults? Their conceptions of the transition to adulthood. *Journal of Adult Development*, 1 (4), 213-224.
- [2] Arnett, J. J. (1998). Learning to stand alone: The contemporary American transition to adulthood in cultural and historical context. *Human Development*, 41 (5-6), 295-315.
- [3] Arnett, J. J. (2000). Emerging adulthood: A theory of development from the late teens through the twenties. *American Psychologist*, 55 (5), 469-480.
- [4] Arnett, J. J. (2003). Conceptions of the transition to adulthood among emerging adults in American ethnic groups. *New Directions for Child and Adolescent Development*, 2003 (100), 63-76.
- [5] Chakshu Narayan, A., & Chakraborty, R. (2024). Contemporary indian way of 'settling down' : Emerging adult's perspective. *International Journal of Adolescence and Youth*, 29 (1), 1-16.
- [6] Cole, M. (1996). Cultural psychology: A once and future discipline. Cambridge: Harvard University Press. (コール, M. 天野清 (訳) (2002). 文化心理学 : 発達・認知・活動への文化 - 歴史的アプローチ 新曜社)
- [7] Crocetti, E., Tagliabue, S., Sugimura, K., Nelson, L. J., Takahashi, A., Niwa, T., Sugiura, Y., & Jinno, M. (2015). Perceptions of emerging adulthood: A study with Italian and Japanese university students and young workers. *Emerging Adulthood*, 3 (4), 229-243.
- [8] Erikson, E. H. (1959). 1980. Identity and the life cycle. New York: W.W.Norton. (小此木啓吾 (訳編) (1973) 自我同一性——アイデンティティとライフ・サイクル 誠信書房)
- [9] 福澤勝彦・王曉丹 (2015). 中国大学生の就職意識と職探し行動——日中の比較. 熊本学園大学経済論集, 22 (1-2), 65-92.
- [10] 人民網日本語版 (2022). 中国の平均初婚年齢が 28.67 歳まで上昇 晩婚化の理由は? 人民網日本語版 Retrieved from <http://j.people.com.cn/n3/2022/0624/c94475-10114601.html> (2024 年 10 月 31 日)
- [11] Katsiaficas, D., Suárez-Orozco, C., & Dias, S. I. (2015). "When do I feel like an adult?" : Latino and Afro-Caribbean immigrant-origin community college students' conceptualizations and experiences of (Emerging) adulthood. *Emerging Adulthood*, 3 (2), 98-112.
- [12] 菊池龍三郎・安達喜美子 (1985). 現代青年における成人感の発生とその社会的規定要因 1. 茨城大学教育学部紀要 (人文・社会科学, 芸術), 34, 111-129.
- [13] 菊池龍三郎・安達喜美子 (1986). 現代青年における成人感の発生とその社会的規定要因 2. 茨城大学教育学部紀要 (教育学部), 35, 189-204.
- [14] 木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い. 弘文堂.
- [15] 国立社会保障・人口問題研究所 (2024). 人口統計資料集 (2024 年度版) IV. 結婚・離婚・配偶関係別人口 表 6-12 全婚姻および初婚の平均婚姻年齢: 1899 ~ 2022 国立社会保障・人口問題研究所 Retrieved from <https://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/PDetail2024.asp?fname=T06-12.htm> (2024 年 10 月 31 日)
- [16] McCoy, S., Chou, C., Grahe, J., Miller, T., & Photias, K. (2024). A comparative study of four-year and community college students' subjective experiences of emerging adulthood, belonging needs, and well-being. *Routledge Open Research*, 1 (17), 1-26.
- [17] 溝上慎一 (2010). 現代青年期の心理学——適応から自己形成の時代へ. 有斐閣選書.
- [18] Nelson, L. J., Badger, S., & Wu, B. (2004). The influence of culture in emerging adulthood: Perspectives of Chinese college students. *International Journal of Behavioral Development*, 28 (1), 26-36.
- [19] Nelson, L. J., & Luster, S. S. (2015). "Adulthood" by whose definition?: The complexity of emerging adults' conceptions of adulthood. *The Oxford Handbook of Emerging Adulthood*, 421-437.

- [20] 能智正博 (2011). 質的研究法 (臨床心理学を学ぶ 6). 東京大学出版会.
- [21] 大石美佳・松永しのぶ (2008). 大学生の自立の構造と実態——自立尺度の作成. 日本家政学会誌, 59 (7), 461-469.
- [22] Ogihara, Y. (2018). The rise in individualism in Japan: Temporal changes in family structure, 1947-2015. *Journal of cross-cultural psychology*, 49 (8), 1219-1226.
- [23] Ogihara, Y. (2023). Chinese culture became more individualistic: Evidence from family structure, 1953-2017. *F1000Research*, 12.
- [24] Pian, C. (2017). What happened in dialogical classes of intercultural understanding? : an analysis of exchanging classes between Chinese and Japanese university students. *Integrative Psychological and Behavioral Science*, 51 (3), 391-402.
- [25] Reifman, A., Arnett, J. J., & Colwell, M. J. (2007). Emerging adulthood: Theory, assessment and application. *Journal of Youth Development*, 2 (1), 37-48.
- [26] Rogoff, B. (2003). The cultural nature of human development. Oxford university press. (バーバラ・ログフ・當眞千賀子 (訳) (2006) 文化的営みとしての発達——個人、世代、コミュニティ 新曜社)
- [27] Sakakibara, T. (2017). Intercultural understanding through Intergroup dialogue between Japanese and Chinese university students. *Integrative Psychological and Behavioral Science*, 51 (3), 359-378.
- [28] 榊原知美・片成男・高木光太郎 (2012). 集団間対話を通じた異文化理解のプロセス—日本・中国の大学間における交流授業の試み— 国際教育評論, 9, 1-7.
- [29] 榊原知美・片成男・渡辺忠温 (2024). 日中韓の大学授業を結ぶ対話的異文化交流授業の開発: 共在的实践を生み出すコミュニケーション構造の解明に向けて. 日本発達心理学会第 35 回大会発表論文集, 529.
- [30] 白井利明 (2020). 30 歳の女性はなぜ自分を大人と思わないのか——縦断的研究. 大阪教育大学紀要 第 IV 部門, 58 (2), 77-87.
- [31] 白井利明 (2021). ジェフリーアーネットにとって成人形成期 (emerging adulthood) とは何か. 大阪教育大学紀要総合教育科学, 69, 163-174.
- [32] Sugimura, K., & Mizokami, S. (2012). Personal identity in Japan. *New directions for child and adolescent development*, 138, 123-143.
- [33] 渡邊恵子 (1995). 自立再考——女性の自立・男性の自立. 柏木恵子・高橋恵子 (編著) 発達心理学とフェミニズム (pp. 77-101) ミネルヴァ書房
- [34] 渡辺忠温 (2009). 中日青年关于高考认知的跨文化比较研究 (Cross cultural study about cognition of entrance examination of Chinese and Japanese adolescents) (Unpublished doctor's thesis) Beijing Normal University, China.
- [35] 渡辺忠温・片成男・山本登志哉・榊原知美 (2015). 大学生の他者理解に関する日中比較研究. 国際教育評論, 12, 19-34.